

# 宮 反

——宮反遺跡緊急発掘調査報告書——

1985.3

中野市教育委員会

# 宮 反

——宮反遺跡緊急発掘調査報告書——

1985.3

中野市教育委員会



遠方(普佐)より発掘地(宮反遺跡)を眺望する



昭和59年度 発掘調査団

## 序

宮反遺跡は、遺跡密集地域高丘・長丘・丘陵の西側千曲川に接する大俣地区にあります。この地区は、昭和27年から28年にかけ一度発掘調査が行なわれ、縄文時代中期末の遺物と住居址三軒が検出されています。

大俣地区は、千曲川の氾濫により洪水被害を受け、田畠・住宅は度々浸水被害を蒙ってきました。このたび、洪水被害から守るために築堤工事が始められました。昭和57年千曲川工事事務所・長野県教育委員会・中野市教育委員会で遺跡保護について協議がなされ、中野市教育委員会が千曲川工事事務所から委託を受け緊急発掘調査したものです。

調査は、日本考古学会会員・中野市文化財保護審議会長金井汲次先生を団長に、調査主任植原長別氏・調査員池田実男氏等にお願いするとともに、地域の多数の皆様方の御協力を得て実施しました。今回の調査によって、住居址4・鍛冶址1・縄文土器片・石器等多数の資料を発掘し、地域の先史の生活や文化を解明するうえに貴重な資料を得ることができました。

酷暑のなか長期にわたる調査になりましたが、地元大俣区をはじめ調査に御協力を賜わりました多くの方々に、心から感謝申し上げるとともに、報告書作成のために御苦労いただいた調査団の先生方に御礼を申し上げます。

昭和60年3月

中野市教育委員会

教育長 嶋田 春三

# 目 次

## 序

第1章	はじめに	1
第1節	発掘に至るまでの経過	1
第2節	調査団の構成	2
第3節	調査の経過	2
第2章	遺跡の立地と環境	4
第1節	歴史的背景	4
第2節	自然環境	5
第3節	周辺遺跡の概要	5
第3章	発掘調査の記録	9
第1節	昭和58年度宮反遺跡分布調査	9
1	調査地の設定及び調査方法	9
2	遺構・遺物	9
3	58年度分布調査小結	13
第2節	昭和59年度宮反遺跡発掘調査	13
1	A地区の遺構・遺物	13
1)	A地区南域(A~I-1~12グリット)	13
2)	縄文住居址	15
3)	1号住居址	16
4)	2号住居址	18
5)	考察	21
2	B地区的遺構・遺物	26
1)	3号住居址	26
2)	4号住居址	27
3)	考察	29
3	C地区的遺構・遺物	31
1)	C地区B~F-5~8グリット	31

2) 繩文時代の遺物	34
3) 錫冶炉址	34
4) 土 壤	34
5) 考 察	36
第4章 結び	45

## 表 目 次

第1表 調査坑集計表	9
第2表 遺構一覧表	9
第3表 1号住居址出土遺物表	18
第4表 2号住居址出土遺物表	19
第5表 C地区出土遺物観察表	41
第6表 C地区出土遺物観察表	42

## 挿図目次

第1図 遺跡周辺図	6
第2図 周辺遺跡分布図	8
第3図 58年度分布調査出土遺物実例図	10
第4図 58年度分布調査範囲グリット設定図	11
第4図 58年度遺構・遺物検出グリット並びに59年度本発掘調査予定地区	11
第5図 A地区G～J-5～9グリット繩文土器片検出図	13
第6図 A地区土塙付近遺構図	14
第7図 1号土塙実測図	15
第8図 A地区繩文住居址炉址	16
第9図 A地区1号住居址実測図	17
第10図 1号住居址土塙D:断面図	17
第11図 1号住居址火床C:断面図	17

第12図	A地区 1号住居址集石造構図	18
第13図	A地区 1号住居址甕片展開図	19
第14図	A地区 2号住居址実測図	19
第15図	A地区 繩文住居址出土繩文土器拓影図	23
第16図	A地区 2号住居址覆土出土繩文土器拓影図	23
第17図	A地区出土遺物実測図	24
第18図	A地区出土遺物実測図	25
第19図	B地区 3号住居址実測図	26
第20図	B地区 4号住居址実測図	27
第21図	3・4号住居址出土遺物実測図	30
第22図	C地区B～F-5～8グリット実測図	32
第23図	炉址(C-1)断面図	32
第24図	C地区鍛冶炉付近図	35
第25図	C地区鍛冶炉実測図	36
第26図	C地区遺物検出図	37
第27図	C地区出土遺物実測図	38
第28図	C地区出土遺物実測図	39
第29図	C地区出土遺物実測図	40
第30図	59年度発掘調査グリット設定図及び遺構検出位置図	43

# 第1章 はじめに

## 第1節 発掘調査に至るまでの経過

千曲川に接する大俣地区は、往古より千曲川が氾濫するたび洪水被害を受け、田畠はもちろん住宅までが度々浸水の被害を蒙ってきた。

大俣地区を洪水被害から抜本的に守るために、両期的大事業である輸車堤防建設が決定し、洪水被災から逃れたいという大俣区民六年の悲願が実現することになり、昭和57年度から築堤工事が始められた。

この堤防敷地となるなかに周知の埋蔵文化財包蔵地である宮反遺跡が存在している。

このため、昭和57年7月に千曲川工事事務所から県教育委員会あて遺跡の保護について協議がなされ、同9月3日に、県教育委員会、千曲川工事事務所、市教育委員会各担当者と地元学識者の金井汲次氏をはじめて現地協議を行った結果

○遺跡保護のため事前に発掘調査をして記録保存をはかる。

○遺跡の範囲に入っている場所の工事は60年度と61年度施工計画となっており、遺跡範囲が約20,000m<sup>2</sup>と広いことから58年度に試掘分布調査を実施して遺跡の状況を把握し、本発掘すべき範囲を確定し、59年度において本発掘調査を実施し完了させる。等協議された。

協議結果をもとに10月6日付で県教育委員会から千曲川工事事務所に宮反遺跡の保護についての回答がなされ、試掘調査計画書及び予算書が提示されるとともに、市教育委員会にも同様の通知がなされた。

58年6月22日付をもって北陸地方建設局長と中野市長の間で宮反遺跡発掘調査委託契約が締約され、緊急分布調査が始まる变成了。

全調査予定地域約20,000m<sup>2</sup>を南北からA～Eまで5地区に区分し、正方位に向く4m<sup>2</sup>(2×2)の正方形グリッドを101坑、任意のトレンチを5坑、計約470m<sup>2</sup>を調査した結果、C、D地区を中心にして34坑から、縄文中期末(加曾利式)と平安時代(区分式)に此定される遺物・遺構が検出され、二時代にわたる複合遺跡として学術研究上極めて貴重なものであることが判明した。

59年5月1日付をもって 前年度調査分のうち、記録保存を必要とする地区約1,700m<sup>2</sup>について、北陸地方建設局長と中野市長との間で宮反遺跡発掘調査(本調査)委託契約が締結されました。

6月8日調査団を編成するとともに、地元区長を始め調査関係諸氏に発掘作業の協力を要請した。

(徳竹 雅之)

## 第2節 調査団の構成（59年度）

調査責任者	鷗田春三	中野市教育委員会 教育長
調査司長	金井汲次	日本考古学協会会員 中野市文化財保護審議会会長
調査主任	塙原長則	日本考古学協会会員
調査員	田川幸生	〃
〃	関 孝一	〃
〃	郷道哲章	〃
〃	池口実男	市文化財保護協力員
事務局	久保昌夫	市社会教育課課長
	小野沢捷	市社会教育課 歴史民俗資料館管理係長
	徳竹雅之	市社会教育課 学芸員
協力団体	大俣区	

参加者 古田茂・畔上親雄・山上喜一・増田恒良・田中さだ子・田川照生・阿藤英矣・阿藤きみ・馬場恒夫・馬場敏子・馬場ハナ子・馬場ハナ・馬場八重子・阿藤仁子・山崎 猛・関 武・阿藤千代江・馬場キク・酒井健次・黒柳美好・阿藤浩一・関 純子・阿藤仁子・藤沢高広・吉見ちづ子・高橋里香・栗原かつ代・松野千枝子・栗原よしみ・藤間とし子・阿藤雄三・安藤 進・郷道和行・馬場光雄・浅沼光吉・阿藤藤江・浅沼徳直・阿藤昭夫（順不同58・59年度）

以上発掘調査のために炎暑且つ多忙のなか鋭意御参加いただいた各位に対し、記して感謝を申し上げる次第である。

## 第3節 調査の経過

◎調査前 調査による調査前最終検討会を行なう。一部資材を現地に搬入する。

6月19日 発掘資材を搬入して、調査団、作業員、地元大俣区、市教育委員会出席のもとに調査団結式と安全祈願祭を行ったのち、調査に入った。A地区グリット設定のちバックフォーにより表土はぎを行う。

6月20日 落ち込みを確認し、掘り下げを行なう。

6月21日 前日の調査箇所を拡張し、住居址と思われる遺構を確認する。

6月22日 A地区未調査部の表土はぎを行う。A地区北すみより2軒目の住居址遺構を検出する。

6月24日 A地区と併行して、B地区の調査を開始する。

6月25日～7月2日 都合により調査一時休み。

- 7月3日 調査再開 1号住居址の測量を行う。
- 7月5日 B地区、国分郷と思われる住居址を二軒検出する。
- 7月7日 B地区検出の住居址を精査する。
- 7月11日 C地区の表土はぎを行う。
- 7月12日 前日の継続で、C地区の表土はぎを行い、遺構・遺物の検出につとめる。C地区より、焼土・須恵器等が検出される。
- 7月13日 A地区、1号住居址出土の遺物を取り上げる。C地区を拡張する。
- 7月14日 C地区より、鍛冶址らしい遺構を検出し、精査する。
- 7月16日 鍛冶址より鉄滓等が出土する。
- 7月17～8月1日 A・B・C地区より検出された各遺構の精査と併行し、3地区内未調査部の拡張を行う。
- 8月2日 A地区 2号住居址を精査し、時期等の確認を行うが、農道下に入ってしまうため、所有者等と連絡をし、測定と検討の結果拡張を決定する。
- 8月3日～8月7日 A地区、2号住居址を重点的に精査、住居プラン、柱穴、土塁、遺物を検出。
- 8月8日 A地区、2号住居址の測量を行い、遺物を取り除いた後、埋め戻しを行う。 8
- 月9日～10日 B地区 3号住居址の測量を行った後、遺物を取り上げを行う。
- 8月11日 C地区鍛冶址の測量を行い、遺物を取り上げる。
- 8月12日 B地区、4号住居址の測量を行い、遺物を取り上げる。
- 8月13日～20日 遺物を取り除いた3地区内検出の遺構を掘り下げ、精査を行う。
- 8月23日 1号住北の縄文時代炉址の測量を行い、遺物を取り上げる。
- 8月24日～26日 清掃の後、写真撮影を行う。
- 8月27日～28日 現場作業調査結果の最終チェックの後、埋め戻しを行い調査を終了する。
- ◎調査の整理
- 現地調査終了後土器洗いと注記を一部事務室で行い、12月初旬市民プール管理棟を整理復元記録の作業場として遺物をはじめ関係資料を搬入した。その後復元記録作業を続けて来たが2月下旬各調査員から報告書原稿が揃い報告書の編集を行った。 (徳竹 雅之)

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 歴史的背景

大倭の歴史は原始時代からはじまる。姥ヶ沢遺跡は集落の東方の丘陵台地上にあって、標高およそ387mに立地し、昭和57年春の発掘調査によって縄文中期住居址と土偶祭祀址等の遺構と土器・石器及び土偶の出土をみた。土偶の一體は有脚立体の河童形（高さ19cm）で、復元によってほぼ完形品となつた。

宮反遺跡は高井大富神社（祭神建御名方命）の脇辺に展開し、昭和27・28年の琵田前の発掘調査によって縄文中期の住居址3戸のほか上器・石器類の遺物が検出されている。

弥生時代の遺物は太形始刃石斧と後期の土器片数点が姥ヶ沢遺跡で採集されているが、遺構は不明である。

姥ヶ沢遺跡の発掘調査は縄文前・中期が主体であったが、4世紀前葉の住居址1戸と土器片が検出された。また、降っては平安時代の土器片も採集されている。宮反遺跡からも区分期の遺物の出土をみているが、陸耕を中心の小集落が存在していたと思われる。宮反遺跡は千曲川を挟んで、対岸に替佐（豊田村）がある。替佐は古代班尾東麓線の交通上の要衝上にあって、墨書土師器の出土等もあることから古代より繁栄した集落である。この影響は大倭にも及んでいたものと推定される。

大倭が文献上にあらわれるのは、中世も後期の寛正7年（1467）の「諏訪御符札之古書」からで、高梨一族の大倭高親が、木光を入侯に置いて、北大熊を矢行し、安田郷の安田尚茂などと花会行事の役銭を分担した記録がある。その居館址は明瞭ではないが、無量寺（青洞宗）の裏山には相当大規模の山城の遺構が残存し、現在も「城っぶら」という地名が残っている。この丘陵からは五輪塔の出土が多く倉島氏の墓地には多量の五輪塔を石積みして境界にしているほどで、堂坊のあったことがうかがえる。無量寺には木造阿彌陀如来座像・木造大日如来座像が安置され、大日如来は像高93cmの室町時代末の作風を残し、慈愛にみちているとともに壯麗な尊像である。元和7年（1621）の福島正則による検地帳のうちには、五輪坊・安養坊・たて・中のたて・ぶたい・市道・やしき・西やしきの地名があり、大倭氏等に関係するものであろう。

近世の支配関係は、慶長3年（1598）上杉景勝が会津へ移封後は、関一政・森忠政・皆川広照・一堀直寄・天領・福島正則・天領・松平忠信・天領・青山幸信・一本多助芳・天領（享保の年）の交代を経た。近世の年貢割付状は全期にわたって皆畠村と記され、用水にもこと欠く水不足の村で、水を求める歴史が続いた。しかし、その反面水害の常襲地帯で、水とのかかわりの深い村であった。明治5年に完成した千曲川直済直し大工事（堀り川）により馬蹄形に湾曲した旧河床は水田化され、近代の数次にわたる開拓事業によって大倭の産業経済は大きく変貌し、現在に至っている。

（金井 次次）

## 第2節 自然環境（第1図）

善光寺平を北流した千曲川は、長丘丘陵の南端、立ヶ花地籍より蛇行し、五段の河岸段丘を発達させている。これは、地殻変動をうけて隆起した現象で、高位より赤埴面、長丘面、草間面、原面、栗林面となっており、宮反遺跡の立地する微高地は、原面に相当し、周辺の地層は、千曲川の氾濫による堆積土層である。この蛇行貫流する千曲川は、明治3～5年の下水内郡豊田村上今井地籍の瀬なおし治水工事によって、大俣地籍の南面を大きく迂回していた千曲川が、宮反遺跡の南方で短絡され、流路は遺跡をめぐってまた東北方向に迂回している。東方は、長丘面の丘陵地帯で、西方に傾斜し大俣の集落は、平地との接点を中心に広がっている。西方は、千曲川を隔てて、山麓の緩急傾斜面や僅かの平地に豊田村荒山、替佐の集落が国道117号線、国鉄飯山線を中心に関連している。

遺跡は、高井大富神社をほぼ中心とした標高336.8mを頂点とした微高地約10,000m<sup>2</sup>の範囲に所在し、小字宮反と一部東反の地籍が該当している。西側方面（B地区）は、千曲川の浸食をうけて、やや斜面をなしている。大俣は、近世、皆畠村として名高いが、昭和初年以來、千曲川よりの揚水により、次第に開拓が進み、昭和27・28年には遺跡の周辺も一部を残して水田が造成された。

遺跡の主要部分は畠地のため、破壊を免れて保存されていると思われる。この微高地の地質は、第四紀更新世の段丘堆積物にあたり、上部と西斜面下方の治積層（千曲川氾濫原）の間には、腐植を含んだ黒色土が堆積している。

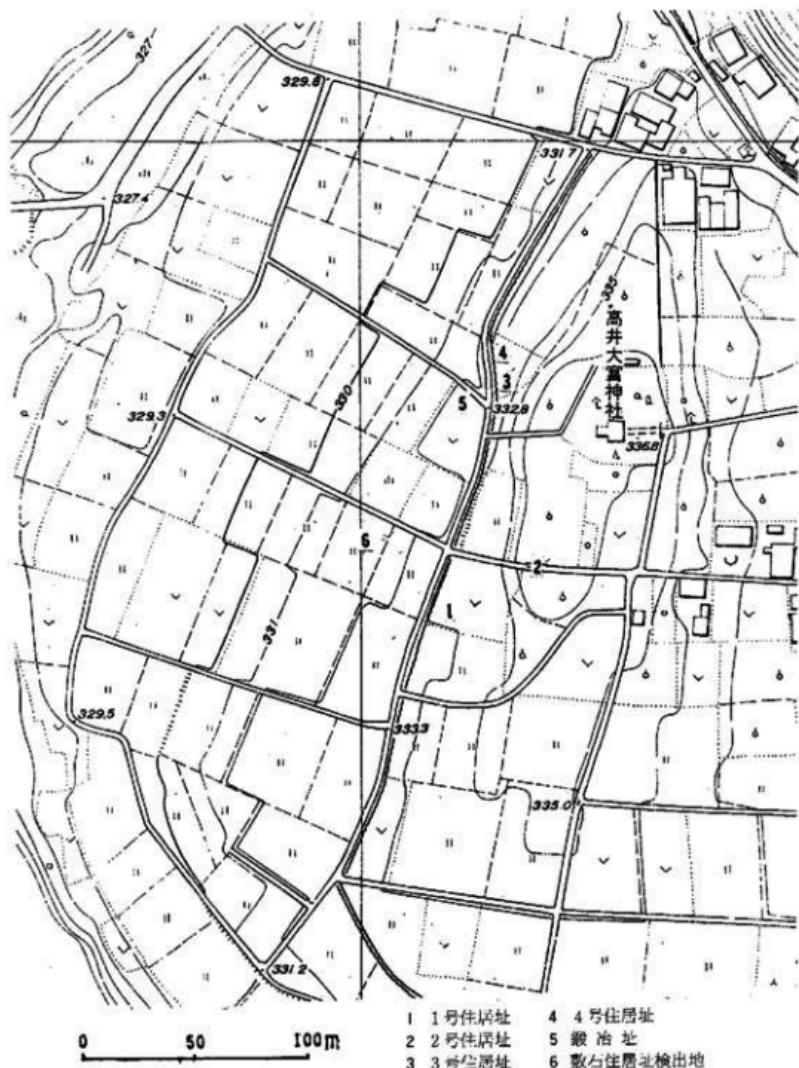
（権原 良則）

## 参考文献

中野市誌　自然編　昭56

## 第3節 周辺遺跡の概要（第2図）

周辺遺跡の概要を記すると、千曲川山河道に面する、姥ヶ沢湖水のある台地上に所在する「姥ヶ沢遺跡」（中野市大俣）は、昭和57年市教委によって発掘調査が行われ、縄文前期末より中期初頭から中葉、そして後半にまで及ぶ構造・遺物が多量に検出されている。また東南方直線距離1,300mには「奈大原遺跡」（豊田村上今井）があり、縄文前期後半の諸磧式に平行する中部山岳地帯の標式遺跡として著名であり（1）、その西方地点には、弥生中期後半の栗林式の遺跡である。その南方対岸の栗林遺跡（牛野市栗林）は、縄文時代の遺物が微弱ながら認められ、弥生・平安時代の複合遺跡で、縄文晚期の亀ヶ岡文化圏の残影が、ここに上器に認められ、信州独自の文様として、昭和初年には、信州最古の弥生土器様式と位置づけられていたが、現在は、弥生時代中期中葉以後に位置づけられ、該期の標式遺跡として、県史跡に指定され昭和23年より、過去7回の発掘調査が行われている（2）。これに続く南方の台地上と南斜面には、「安源寺遺跡」（中野市安源



第1図 遺跡周辺区

寺)が所在し、先土器・縄文・弥生・古代・中世の複合大遺跡で過去3回の発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代・平安時代の好資料を提供している(3)。

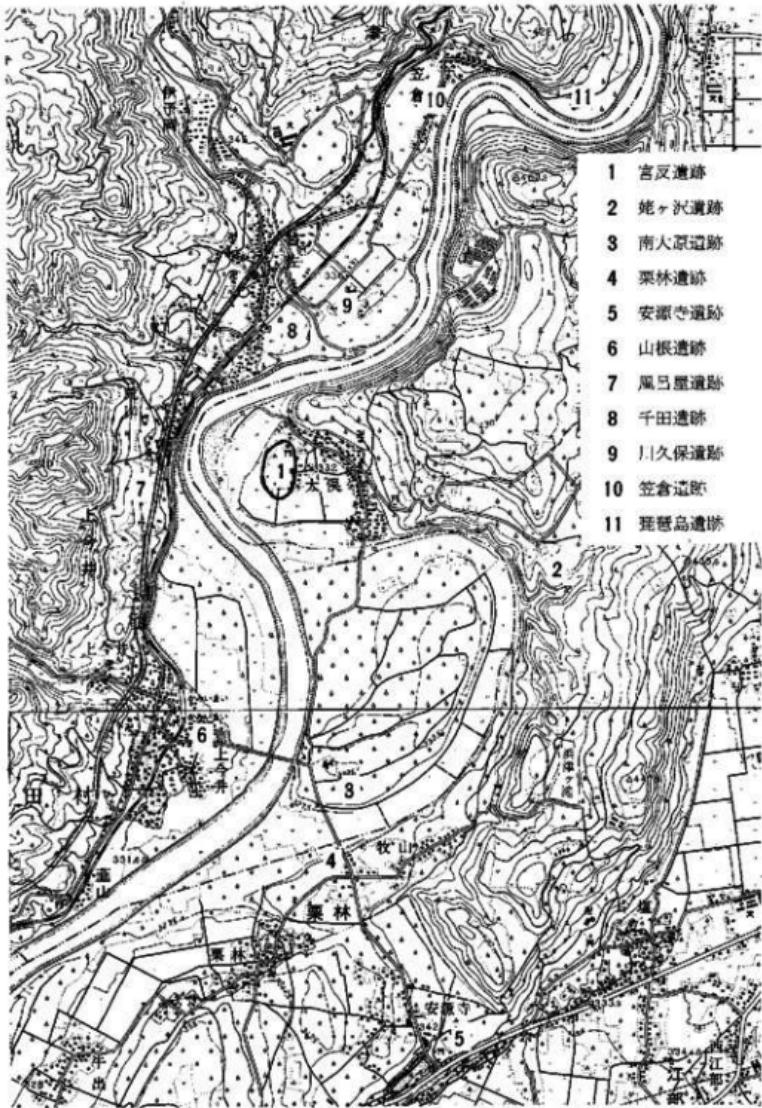
対岸の豊田村では、「山根遺跡」(上今井)は、縄文中期初頭から晩期まで弥生・土師の複合遺跡で、後出の千山遺跡と同じく加曾利E式土器が検出されている。

すぐ対岸の山麓に位置する「風呂屋遺跡」(上今井荒山)からは、縄文中期勝坂式、後期土器、灰釉などが発見されており、「千所遺跡」(豊津・替佐)は段丘上に位置し、勝坂式・加曾利E式・弥生箱清水式・土師器の遺跡で、加曾利E式土器は、宮反遺跡出土のものと同じく沈線文の多用された土器であると神田五六氏が記している(4)。「川久保遺跡」(豊津・替佐)は段丘上に位置し、弥生中期後葉の当穂式土器の遺跡で、また後述の墨書き土器の出土地として知られている。また隣りの「宮沖遺跡」からも弥生後期の土器が検出されている。「笠倉遺跡」(豊津・笠倉)も段丘上に位置し、栗林式・箱清水式の弥生遺跡で、かつて有孔石劍・有溝石劍・細形管玉の出土地として知られ、「琵琶島遺跡」(同所・宮脇)も縄文中期土器・栗林式・箱清水式の大遺跡として知られている。以上の豊田村の遺跡は文化をはぐくんだ母なる川、千曲川岸に位置する遺跡である。

(横原 長則)

#### 参考文献

- 1・2・3 長野県史 考古資料編 主要遺跡東北信 昭57
- 1・3 中野市誌 昭56
- 4 豊田村史 昭38



第2図 遺跡分布区

## 第3章 発掘調査の記録

### 第1節 昭和58年度 宮反遺跡分布調査

#### 1、調査地の設定及び調査方法

全調査予定地域、約20,000m<sup>2</sup>を南からA～Eまでの5地区に区分して、調査地を設定した。

(第4図)

調査坑は各辺が正方形に何く4m<sup>2</sup>(2×2)の正方形グリッドとしたが周辺の状況で任意のトレンチを数ヵ所用いて、調査を進め総計グリッド101坑、トレンチ5坑、面積にして約470m<sup>2</sup>を調査した。その分布は、第1表及び第4図のごとくである。

第1表 調査坑集計表

地区	A	B	C	D	E	計
調査坑数	4	17	38	34	13	106

調査は、本部とした高井大富神社から最も遠いA地区よりアルファベット順に順次北に向かって調査を進めた。なお以前故神田五六氏の調査された地域周辺と表採遺物の多かったC・D地区については特にグリッドを密に設定し、調査を行った。

#### 2、遺構・遺物

106ヶ所の調査坑のうち、遺構・遺物の検出をみたのは、34坑からであった。以下遺構と遺物の概要を記述したい。(第4図)

[遺構]

調査坑から遺構の検出されたのは、C地区は6坑であった。A・B・C地区水田として利用さ

第2表 遺構一覧表

調査坑	遺構	地表下	直 径	概 要
C-8	土塹	15cm	110cm	磨石、打製石斧、縄文土器片
C-7	柱穴	40cm	20cm	グリッド東壁近く
C-11	柱穴	40cm	25cm	グリッド南側すみ
C-12	柱穴	40cm	25cm	グリッド西側壁近く
C-15	柱穴	40cm	30cm	グリッド西側
C-21	柱穴	40cm	40cm	グリッド中央

れている所がほとんどであったが、昭和3年、20年、28年と転作工事がなされる以前は、畠地として利用されていた。

分層図から考えると、古代から何度となく千曲川の浸水をうけている所でもあり、特にA・B・E地区については、遺構・遺物等の検出は皆無であった。

検出された遺構については、第2表のことおりである。なお、遺構はプランを確認するのみで、掘り下げはせず、記録して後の調査のため埋めもどした。  
(徳竹 泰之)

[遺物] 第3図

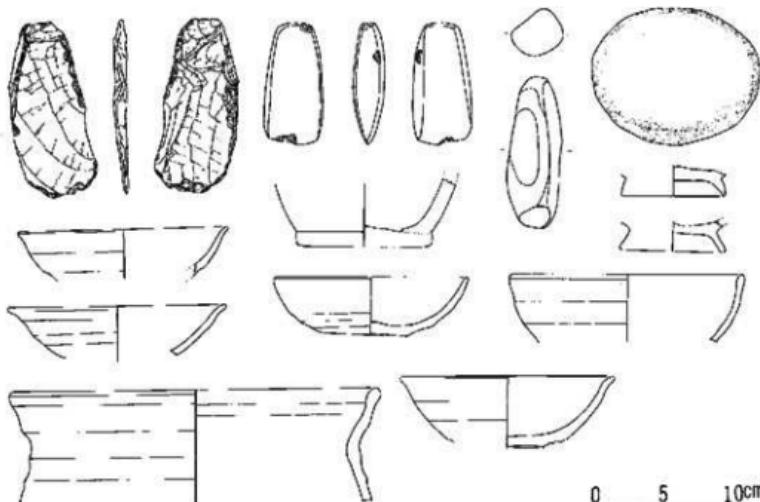
(打製石斧) C 8 グリットから検出された土塙墓状のプラン中より出土した刃部のやや広がりをもつ、安山岩製の扁平な打製石斧である。

(磨製石斧) D 5 グリットより単独に出土した硬砂岩製の定角式の小形磨製石斧である。

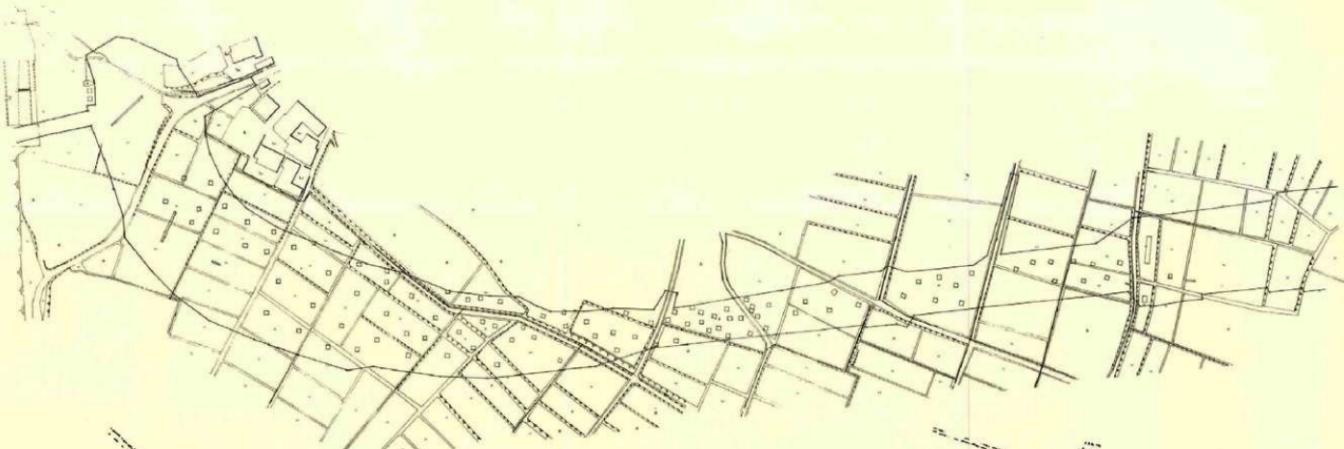
(敲打器) 円柱状の円錐で両端に敲打した痕跡があり、一方の強く磨減した面には火熱をうけている。砂岩製C 16 グリット出土。

(磨石) 安山岩製の手に握られる程度の円錐で調理道具に利用されたものであろう。D 8 グリット出土。

(縄文式土器) C 22 グリットより底部部分が出土したが、底部を倒立して後に対着させており、中高底で接着面が剥離している。その他の縄文土器片は10片程あり。D 5 グリット附近より出土した縁带上に直み目のあるものや、縄文押捺の小破片などいずれも縄文中期の加曾利E式期の所産と思われる。



第3図 58年度分布調査出土遺物実測図



第4図 58年度分布調査範囲グリッド設定図



第4図 58年度道構・遺物検出グリッド並びに59年度本発掘調査予定地区

凡例 □58年度道構・遺物検出グリッド  
—59年度本発掘調査予定地区



（上部器）所産の時期はすべて国分期（平安時代）に属し、復元出来たものは壺4個体あり、その他壺の破片、壺の小片である。壺は内黒と褐色を帯するものが半々づつで、高台付の壺も半数である。高台は、糸切の後に高台部を付着させた痕跡が明瞭である。いずれの土器片も鉄分粒を含み砂粒の外、金雲母が見られる。これらの遺物は、D地区の高所地点より出土した。

（檀原 長則）

### 3、58年度分布調査小結（第4図）

今回の調査の成果については、既述の如くであるが、高井大富神社の裏手の約40m西方に長さ約170m、幅22~33mにわたって縄文中期末（加曾利式）と平安時代（国分式）の遺構・遺物の検出を見、二時代にわたる複合遺跡としての学術研究上極めて貴重なものであることが判明した。

大俣部落は千曲川の氾濫時には、洪水の常襲地帯であって、早急に築堤することによって住民の生命・財産の保全を図らねばならぬところである。

そこで、宮反遺跡は、築堤施工前に本発掘調査を行い、記録保存措置もやむをえないと判断する次第である。

なお、記録保存を必要とする発掘調査地の面積は、およそ1,700m<sup>2</sup>である。（金井 次次）

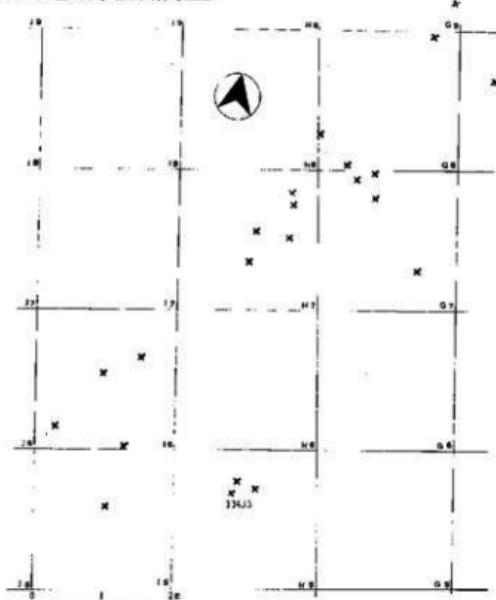
## 第2節 昭和59年度宮反遺跡発掘調査

### 1、A地区の遺構・遺物

#### 1) A地区南域（A-I-1～

##### A-I-12グリット）の調査

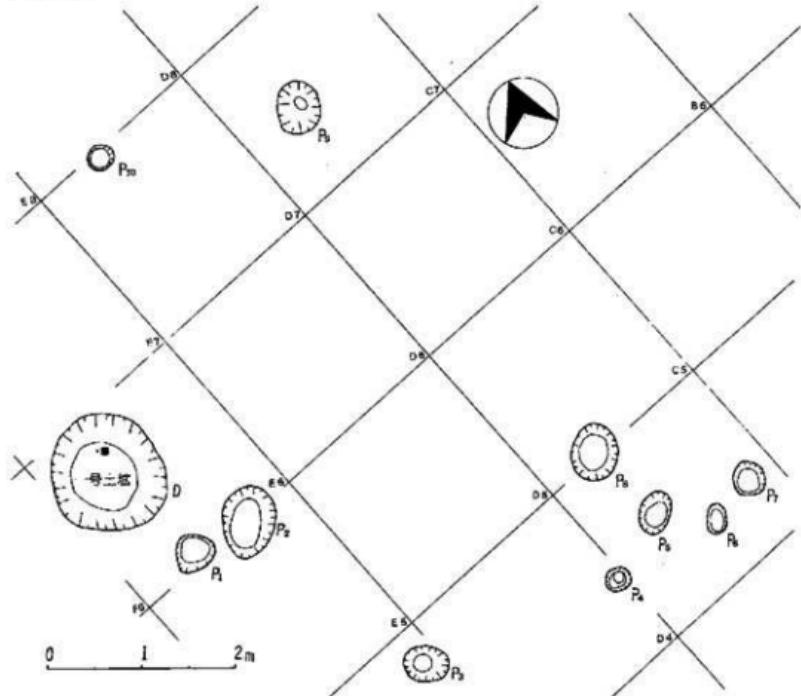
この調査区からは、近世の陶磁器片の外は前章の如く、縄文中期最末の土器、それに伴う石器と遺構が検出されたが、今回の調査地点が微高地状の地形のため、遺物・遺構の埋没状態が浅く、耕作中に破壊消滅され、痕跡が認められただけである。また眉序は、縦二約15cmで、以下黄褐色の耕盤に達するため、その間の土器片は磨滅し、打石斧も折損して耕作中にうけた瑕が、多く見つけられた。第5図はこの調査区の縄文土器片の散布状



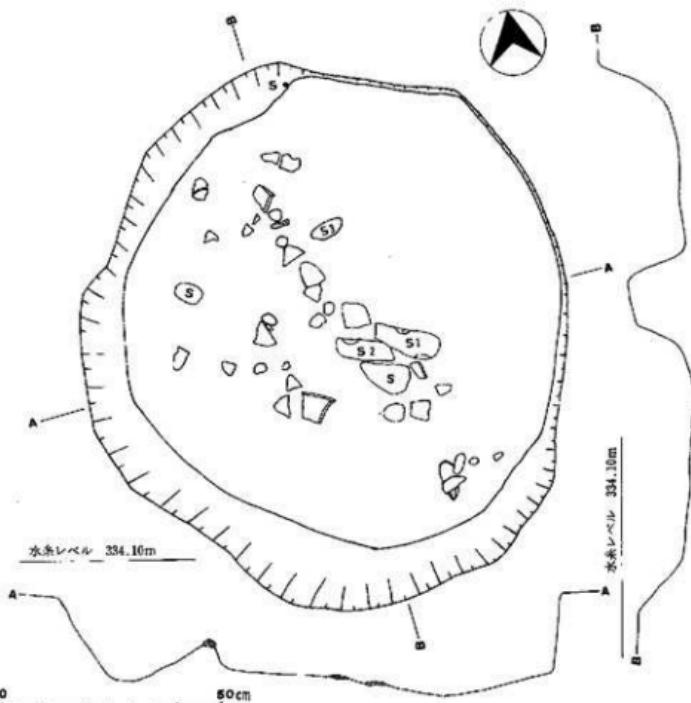
第5図 A地区G～J-5～9グリット縄文土器片検出区

態を示し、第6図は遺構図である。これには、柱穴と思われるものと土塙状の遺構が検出されたが、前述の如き条件で住居址の確認是不可能であった。第7図は土塙の実測図で、土塙は、長径1.2m、短径1.1m、深さ約27cmのほぼ円形を呈し、上塙内には焼土が多く認められた外、炭片などもあった。遺物は、縄文中期・加曾利E式期の土器片が、1群39片、2群64片認められたが、ほとんどが無文の深鉢破片で1割が有文であった。完形の打石斧3点は第7図内S3・S4・S1でそれぞれ第17図6・8・7で、8の打石斧の実線部分には両端に土づれの痕が明白に認められる。

その他、黒縞石片1・珪石片2・直徑11cm・厚さ2cmの楕円形の安山岩の扁平石2個・直徑10cm前後の河原の円礫が数個含まれていた。第17図9~20は、この調査区から検出された石器で、打石斧はすべて安山岩製で、図示しない破片が10個ある。12は、尖頭器の両端破損した残存部と考えられる。13は、ピエス・エスキューで両者とも珪石製である。21は、石英の含んだ河原の円礫である。



第6図 A地区土塙付近遺構図



第7図 1号土器窯跡図

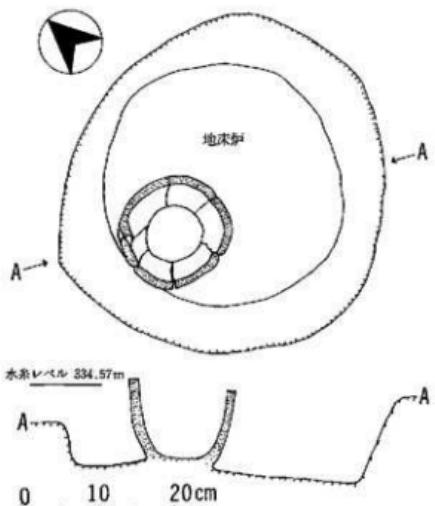
## 2) 繩文住居址

### [遺構]

G18グリット付近は、58年度の分布調査の時点から黒色上の陥没部分があり、住居址の存在が予想されていた。縄文住居址は、1号住居の構築と床面まで約15cmの浅い土層のため、破壊をうけており、残存部が確認されたに過ぎなかった。第17図1・2・3・は、1号住居の覆土中より検出されたもので、4は、北壁面上より検出された炉体上器で、2次焼成で脆弱となっている。またこれより北約60cmの位置に、直径約43cmの地火炉があり（第8図）中に第17図5の土器が埋設され、左右に小石を配した状態で検出された。この様に1号住居址が縄文住居面より約30cm深く掘り込まれていたために、縄文住居の柱穴、規模などは確認できなかった。

### [遺物]

第17図1は、黒褐色の薄手の小形深鉢の破片で、残存部は無文である。2は外面黄赤褐色、内



第8図 A地区縄文住居址

### 3) 1号住居址(第9区)

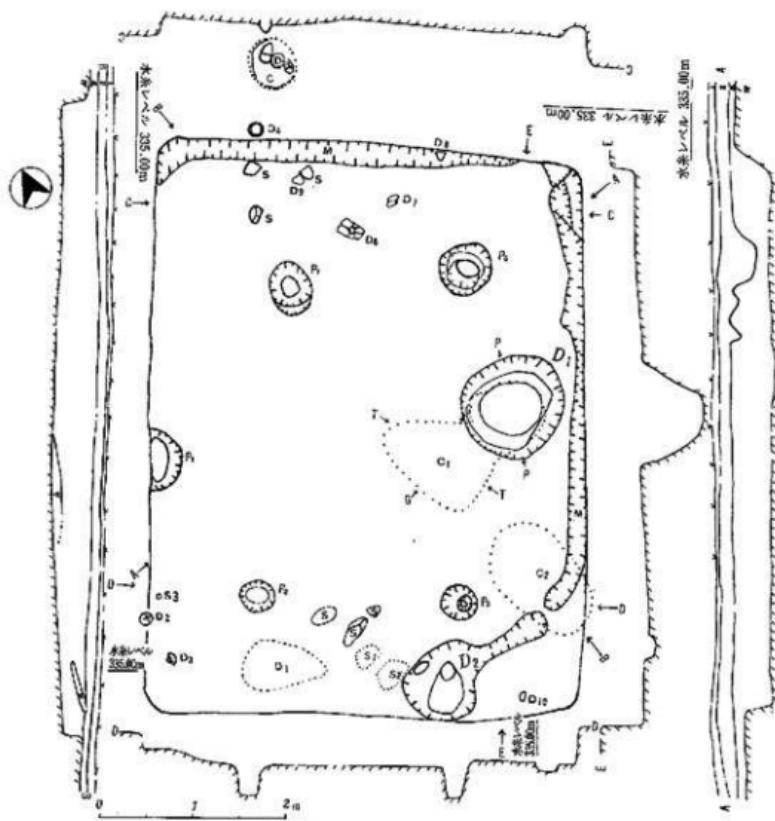
#### (遺構)

1号住居址は、前述の如く縄文住居址を切って構築され、上の平坦面よりやや西南に下降した位置に構築され、床面までは現地形面より、約60cm深さを含んだ黒色土が充填されていた。南北(長径)5.8m、東西(短径)4.6mの楕円長方形を呈し、西側で15cm、東側で40cm耕作土下より掘り下げられていた。北側壁下と東側壁下には、巾20~30cmの周溝があげられてD2土塙に収集されていたとも考えられた。P2(-300cm)、P3(-35cm)、P6(-30cm)、P7(-40cm)は主柱穴と考えられる。D1は直径約1m、深さ60cmの土塙で貯蔵穴と考えられている。(第9図)、C1・C2は焼土の広がりを測定したもので、焼土1の部分は、主柱間の中間にあり、焼土2は、コーナー部分に接して所在しており、どちらが主体の炉部分かは、連断できないが、地面を掘り凹めた地床炉から、確に移行する火床の形式で粘土で簡単な炉が、構築されていたと推考される。(第9図) S1・S2は、南壁側近くに足跡の如く二群に分れ、直径1~5cmの河原石を集積した遺構・用途などは不明である。(第12図)

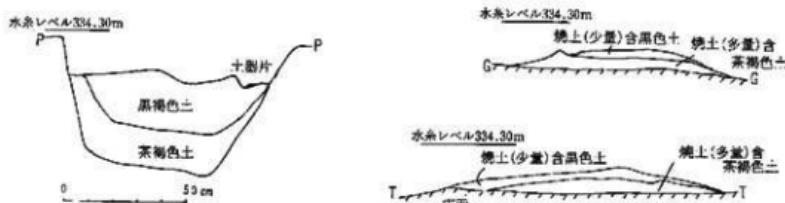
#### (遺物)

検出された遺物は、南側中央部よりに甕(D1)が破壊されて展開し(第13図)、その左側コーナーに器台の脚部(D2・D3)が横転しており、右側に小形碗形土器(D10)があった。北壁面中段に赤彩された高环状部(D8)があり、その南側床面上に器台の脚部(D7)と壺破片が

面黒褐色の土器で、在地の土器らしく胎土に鉄分粒が含まれ、底部のやや立ち上った部分から強く外反する器形で、下半部分のみの残存で縄の尾の太い沈線の間に、RL縄文が押捺されている。3は、底部のみの土器で、外瓦赤褐色、内面黒褐色の上器で、上体部分は失われている。右燃りの縄文を器面の乾燥の進んだ段階で主に横向方に押捺回転されている。25は、1号住居覆土中から検出された土版で1個体の発見である。



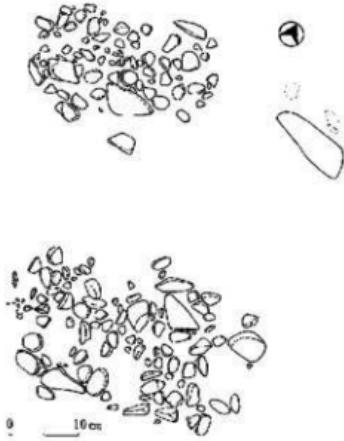
### 第9圖 A地區1號住居址實測圖



第10図 1号住居址七塚D、断面図

第11図 1号住層柱火炎C、断面図

第3表 1号住居址出土遺物表



第12図 A地区1号住居址集石遺構図

遺物	位置	住居址実測図	遺物実測図
1 磁	床面	第9回D <sub>1</sub>	第18回1
2 器 台	〃	第9回D <sub>2</sub>	第18回4
3 *	〃	第9回D <sub>3</sub>	第18回3
4 *	〃	第9回D <sub>4</sub>	第18回5
5 高 坯 壊 部	壁面	第9回D <sub>5</sub>	第18回2
6 小形碗形土器	床面	第9回D <sub>6</sub>	第18回6
7 瓷 破 片	〃	第9回D <sub>7</sub>	—
8 小形広口壺破片	〃	—	—
9 磁 破 片	〃	第9回D <sub>8</sub>	—
10 高 坯 破 片 金 彩	壁面	—	—
11 磁 破 片	〃	—	—
12 蕾文土器片17	〃	—	—
13 土 版	〃	—	第17回25
14 打 石 破 片	〃	—	—
15 経 石	床面	第9回S <sub>1</sub>	第17回23

展開していた。また調査には、河原石3個と壺破片(D9)があり、経石(S3)が、西壁よりの器台(D2)の調査より検出され、この器台は、壺部破損後、蓋などに転用された痕跡の有するものである。

次に土器について若干の考察を記すと、[小形碗形土器]は、薄手で胎土に鉄分粒を多く含有した赤褐色の無塗彩の土器で在地の生産らしく思われる。[器台形土器]1号住居址からは3個体検出されたが、何故か壺部が破損したものばかりで、壺部の形態が不明で器台か高壺か判断に迷ったが、脚部が直線に広がった形態や、塗彩のない粗製の作りなどから、一応器台として扱うが、この結論が、正しければ古墳時代の器台より人形なことに注目したい。(菱形上器)菱形上器の脚部文様は、千曲川下流地方では初見のもので、頸部に菱状文が一周し、肩部は斜状羽状文が施されて、使用により火熱をうけて器変割離している。下部は無文である。全般に赤褐色を呈するが、黒褐色の部分もみられる。口縁直径24.7cm、底径33.2cmの法量で、やや尖つまつたびんぐりとした器形が特長でこの上器の類例を求めるとき、模倣をもった遺跡として知られる佐久市根々井「餅田遺跡」(1)出土の菱形上器がある。臼田(1980)は、佐久の弥生土器を4分類し編年しているが、その第4類か、やや前出の形式であると結論づけている。

#### 4) 2号住居址〔第14図〕

##### 〔遺構〕

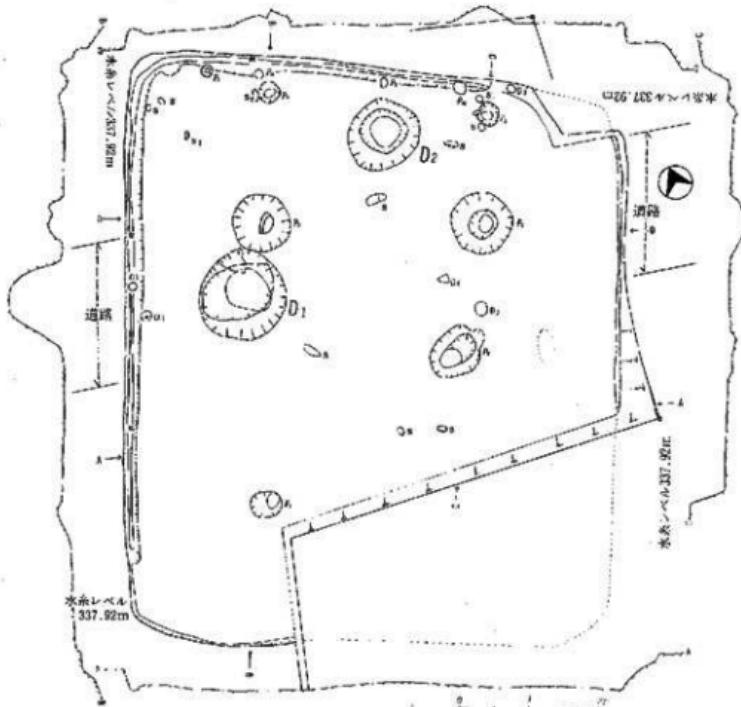
2号住居址は、1号住居の北東約20mの丘頂部のやや西よりに所在し、用地外の部分があつて完掘できなかったが、大略のプランは推定できた。南北8.4m、東西7mの隅丸長方形のプランで、



第13図 A地区1号住居址陶破片展開図

第4表 2号住居址出土遺物表

遺 物 名	位 置	壁	住居址実測図	遺物実測区
1 高 杯	床面周溝	第14区D1	第18図9	
2 高 杯 部	床 面	第14区D4	第18図7	
3 高杯脚底破片	覆 土	-	-	
4 茶 台 脚 部	床 面	第14区D3	第18図10	
5 斜り 直 口 縁 片	覆 土	-	-	
6 壺 玻 璃 片	土 堆 内	-	-	
7 七 曲 器 片	覆 土	第14区D2	第18図8	
8 土 師 片 数 点	*	-	-	
9 長 短 円 の 円 縫	床 面	第14区S	第17図22	
10 織文中期十輪 片 356点	覆 土	-	第16図	
11 地 上 器 片 数 点	*	-	-	



第14図 A地区2号住居址実測図

覆土は、東北隅で60cmをはかり、下に床室が検出された。発掘当初、覆土中より多量(356片)の純文土器片が検出されたため、縄文住居址ではないかと想定されたが、1号住居とはほぼ同年代の遺構であることが確認された。ローム面を西側で約20cm、東側で約40cm掘り込んで床面をつくり、西側と東側に周溝をめぐらし、P1・P2・P6が主柱穴ではないかと推定され、D1・D2は直径0.9~1m、深さ0.8mの土塙で、底に良質の粘土を張ってあり、掘削には巾3~5cmの器具が用いられ充填した上は、粒子がやや荒く、中から壺片などが検出されたが、地山面との剥離が容易であった。北壁の周溝の直径13cm位のピットは、家の周囲の柱穴であると思われる。

#### (遺物)

先述の如く2号住居址の縄文土器片は、覆土中より検出されたもので、近くに縄文住居址の遺構が存在することを予見させるものである。土器片は、356片を数えるが、細片が多く、器面も磨滅して鮮明を欠き、図示したものはそのうちの一部であり器形の知れるものは、存在しなかった。(第16図)2・7は、隆帶を伴うもので、2の隆帶には、長梢円状(プロペラ状)の範おさえが行われている。3・6は、波状L縁の土器の破片で、3は八字状の沈線のみの破片。6は太いRL縄文の施文後に二縁にそって太い沈線が、めぐらされている。5或いは18も、縄文施文後に沈線で長方形に区画される土器と思われ、縄文住居址出土の第15図2・4も同じ様な構図と思われるが、間に無文帯をはさむものも存在する。7・10・11・13・18はLR縄文の破片で、1・4・5・6・8・12・14・15・17はRL縄文の破片で、17に代表される如く太日の縄文の押捺回転が特長づけられている。またこの期の土器には、9・16の如き簡略状の沈線の土器と8・12の如き粗に縄文施文がなされるものこの地方の土器の特色といえる。また粗製厚手の土器片も今回の調査で確認されており、既出の資料とともに加曾利E様式の後半に位置する地方色豊かな土器群と考えられる。

次に弥生時代以後の2号住居址に関連するものを主とした遺物は、【高坪】(D1)は西側壁の周溝中央部に坪部と脚部に分れてあり、器面に塗彩なく、内外面範磨きされ脚内には、ナデあとが残っている。坪部は失われているが、脚には3孔が穿孔され、下部が広がった器形である。第18図11は、参考図版として掲げたもので、59年5月中野市七瀬遺跡(2)(小池昌訓氏姪)の緊急発掘調査で、検出された箱清水終末の脚内を除いて全面に赤彩された高坪で、碗形の坪部と脚が頑かく下部の広がった器形が特異的な土器で、古墳時代・五頭期の高坪に似ており、この高坪もそれに後続する高坪として注目される。【器台】(D3)は、1号住居の器台と形態が同じで、胎土に石英粒・金雲母含有し、外面は範磨き脚内刷毛などの赤褐色の上塗である。【高坪(部破片)】(D4)は、黄褐色の塗彩されない高坪の破片である。その他、折り返し口縁の乱れた御墨書き波状文の施された壺の小破片、赤彩の高坪脚部の小破片、土壙内から検出された壺の破片などがあり、近世、儀縄みに使用されたような長梢円の石2個(S1・S2)が、西北のコーナー付近で検出されている。また覆土中から内黒土鉢器の破片が検出されたが、【リ形土器】(D2)は、住居址中央部の床面上10cmの位置に正位に埋設され、他の伴出遺物の年代から推して、住居が埋没した

段階で、何かの目的意識を持って埋納されたものと考えたい。この壺は、内黒で内底面中央部が、やや盛りあがりのあるもので、多面は赤褐色の焼成で、輪縁痕が残っているが底の糸切り部分は、ナデ整形されている。この様に胎土は左地の土器らしく見えるけれど、丁寧に製作されている。そして外面体部中央に墨書「金」と判読できる文字が書かれている。この書体をみるとかなり能書で、松田舒編「五体字鑑」(柏書房)から摘出してみると、平安時代初期の能書家とされる橘逸勢(?)~842)(3)の書に運筆が似ている点が指摘できる。この様な墨書き器が、学術調査で検出されたのは、中野市では初見である。刻書き器は、草間の茶臼塚5号墓址の須恵器頭部に「井」「土」と刻書されたものが知られている。(4) 市内岩舟出土の壺に「天」と書かれた墨書き器の所在は現在不明である。(5) また下高井戸内臼土として器形不明、三脚器、施文個所不明として「元」「小」の資料が、報告されている。(6) 千曲川を隔てた宮反遺跡の北方、豊田村川久保遺跡からは、口縁器形僅か外反する、焼成堅織、褐色の壺に「七年」と年号の書かれた壺や、今回出土した墨書き器と同一器形と思われる壺が出土している。(7) 県内で「金」と書かれた墨書きは、下伊那郡高森町下古町、新井原遺跡山上の灰陶高台壺の底部外面に書かれた「金」がある、但し右半分欠損している。(8)

県内の墨書き器については、西田正彦の資料集成がある。(9) それによると、県下の墨書き・刻書き器の出現は7世紀後半とされ、出土地点別では、圧倒的に住居址(集落址)が多く続いている。器形別では、墨書き合せて壺形が95%と多く、その中でも漏水防止完備の黒色土器が87%で、書かれた箇所では体部68%、底部25%、体部底部両端所3%で体部例が他県例に比べて多い点が、指摘されている。この様にこの墨書き器は県下多数例の範囲に入るものの、平城京(710~793)出土の墨書き上器(10)に留書の例が多くみられるのは、文字が一般の人々にも書かれ、地方では或る限られた人達の所産と考えられるが、(川久保例も能書)「金」の墨書きに隠された歴史の背景は現在の如く、不明というしかない。

### 5) 考察

#### (1号・2号住居址の編年位置について)

当初から調査段の関心は、1・2号住居址の編年位置の問題で、縄文三脚器や墨書き上器の検出は論外としても、弥生後期(箱清水期)と古墳時代の土師器をどこで線引きするかであり、文化内容がその接点に位置すると思われたからである。まず遺物の面から検討してみると、碗形部の赤彩された高壺、脛にふくらみのある壺の文様は、箱清水式の伝統の線上にある上器であり、これに対して壺の口縁部破片の存在や、小形碗形上器、器台は赤彩塗彩されず(11)古代土師器の範囲に入ると思われるものである。2号住居では、前者は、赤彩された高壺脚部の破片、折り返し口縁の壺の小破片で、後者は、高壺器台などである。壺(1号住居)は、先述の如く弥生後期後葉に位置づけられており、次に器台形上器について検討すると、小形器台形土器の出現は、畿内では弥生中期後半に一般化し、後期には、中部地方・北陸地方に波及したとされる。第18図11(高壺)12(器台)は、先述の七瀬遺跡の未発表資料で高壺の形態は、関東の五領式に類縁関

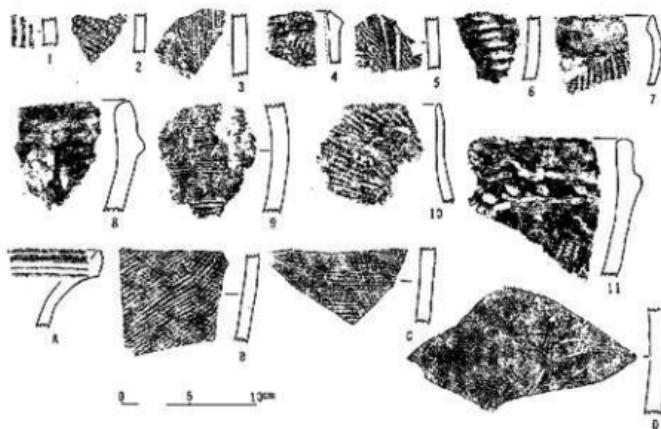
係があり、器台も神奈川県平塚市王子台遺跡H 8号住居址出土(東海大学王子台遺跡調査会保管)の小形器台に類似している。遺跡の立地が傾斜面で、住居址の確認が不充分であったが、これらは箱清水式の壺・壺などと同一面で検出されているが、高环は箱清水式の系譜上の土器・器台は定形化される古代土器であると二者の所属時期を別に考えている。1・2号住居の器台の脚部の形態は、奈良県平城宮跡下層出土(庄内式・4世紀後半)に類似し、2号住居の高环の形態も共通点が多く見出される。だが、御屋敷I式土器(12)の組成は、壺・壺・高环・小形器台・蓋形土器とされるが、このうち中野地方では、台付壺(小形でないもの)が未検出で、現時点では善光時平南郡地方と弥生終末古墳時代初期の文化の様相(主として土器の組成)に違いがみられる。

次に遺構の面から検討してみると、火床は2ヶ所から検出され、床面上に粘土で囲んだ炉址で、床面を掘り凹めた地床炉から、石組竈に至る前段階の様式であろう。住居址の規模は、上山田町御屋敷遺跡では、箱清水期Y 2号住居 $7 \times 5$ m・長方形、弥生終末古墳時代最初頭Y 4号住居 $5 \times 5$ m・方形、Y 1号住居 $8 \times 8$ m・方形、古墳時代前半期H 16-18号住居 $6 \times 5.5$ m・短長方形、平安時代前半II 4号住居 $4.5 \times 4.5$ m・方形、同後半H 2号住居 $3 \times 3.5$ m・短長方形とされ、中野郡赤岩の神宮寺下遺跡(13)では、上部編年鬼高式第2様式の $7 \times 63$ m・長方形のプランで石組竈と貯蔵穴(長径1.1m・短径0.9m・深さ0.8m)が検出されており、規模と貯蔵穴の存在に共通点がみられる。このように今回の官房遺跡の調査では、3号・4号住居址を含めて、北信地方や全国的な趨勢の中にあることが、確認された訳で、この背景にある歴史の流れは、ここでは、触ることはできないが、遺物の面からみても、岩崎卓也は古式土器の齊一性の概念に再検討(14)を加えられ、小形丸底土器出現以前の高环・二重口縁壺・小形器台の成立をもって古墳時代への推移とし、これらの土器群は、祭祀に関係あるもので在地首領の「大和朝廷」との従属関係上に成立し、これらの土器群は、全国的な齊一性が認められるが、日常生活に関する土器群(壺・小形碗形土器)は全国的な齊一性が少ないとして、古墳の成立と関連づけて考察され、これによっても、1号・2号住居址の編年位置は、弥生終末・箱清水式の最末か、古墳時代初頭に位置づけるのが、妥当だと考えられる。

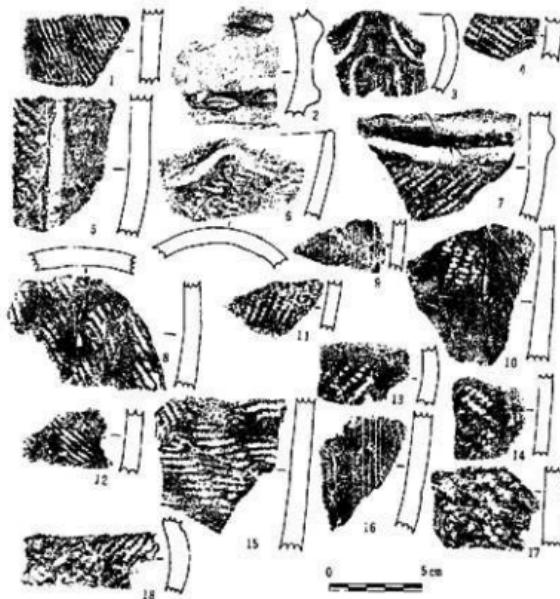
(権原 長則)

#### 参考文献

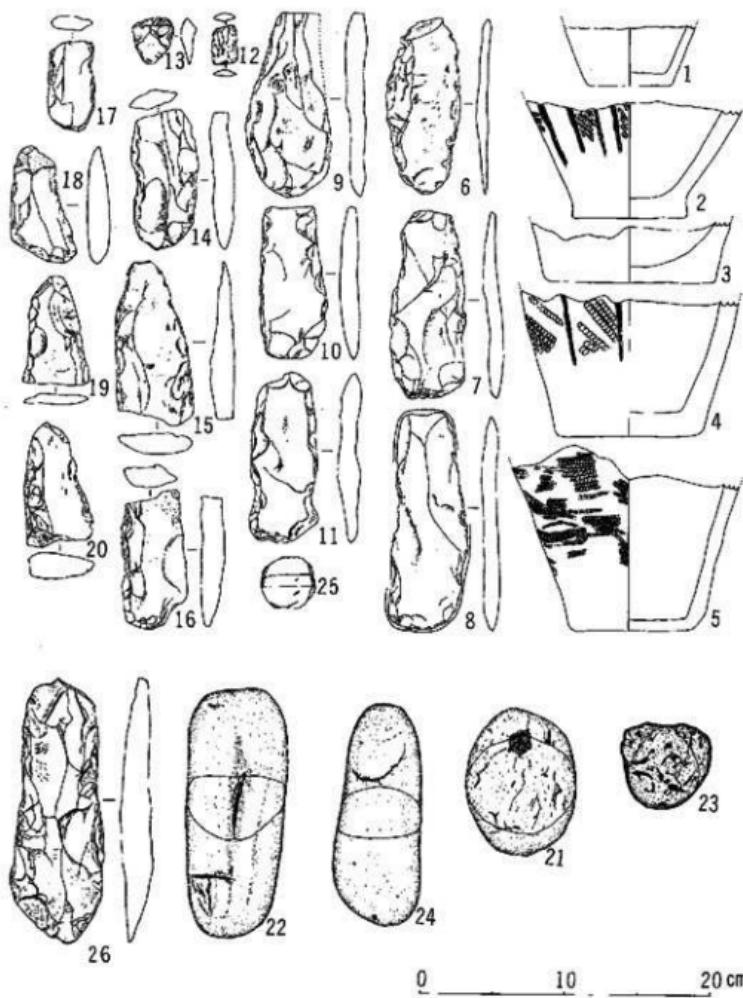
- (1) 白田武正 佐久地方の後期弥生式土器について 信濃 32-4 昭55
- (2) まだ未報告資料である。
- (3) 古代の三座(藤原天守・清空殿)の1人、伊都内親王源文などの作品は、鑑賞が困難だとされている。
- (4) 金井義久一郎先生談
- (5) 中野市誌 盛史編昭56
- (6) 大場謙雄他 平出 昭30
- (7) 菅沼 神 北信濃川久保出土の墨書き土器 信濃川10-12 昭33
- (8) 河井正彦 猪田下伊那地方の墨書き土器 伊那 昭
- (9) 岡田正彦 墓壺・刻書き土器小考 —長野県下出土例を中心として 信濃川25-4 昭48
- (10) 奈良国立文化財研究 平城宮出土墨書き土器集成1 昭58
- (11) もともと、この地方に登場した時から、津影されていない。
- (12) 千曲川水系古代文化研究所 織田 昭55
- (13) 金井義久・権原 長 西野郡中野市赤岩神宮寺下遺跡 調査報告 信濃川10-8 昭33
- (14) 岩崎卓也 古式土器考 考古学雑誌 48-3 昭37



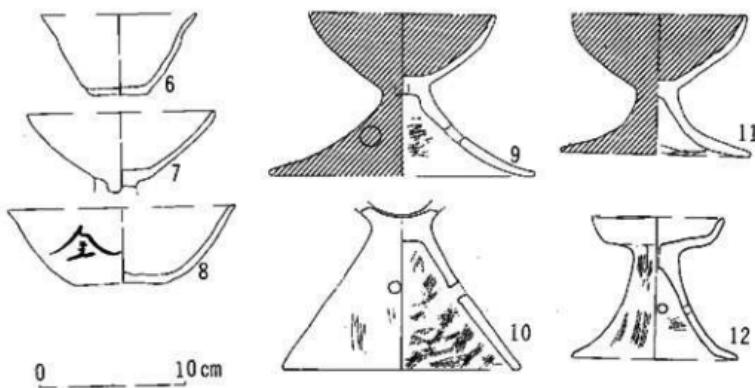
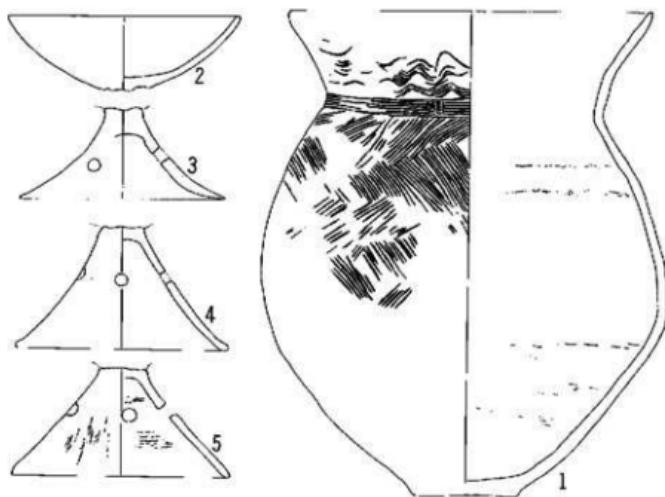
第15圖 A 地區繩文住居址出土繩文土器拓影圖



第16圖 A 地區 2 号住居址覆土出土繩文土器拓影圖



第17図 A地区出土遺物実測図



第18図 A地区出土遺物実測図 (\*11, 12は白野市七瀬遺跡出土)

## 2 B地区の遺構・遺物

この調査地区は、高井大富神社の裏にあたり、59年度本発掘調査区域の中央から北限に至る範囲の上半部であり、A地区の標高よりもやや低いものの丘頂部に近く、現在の水害時においても被害を免れる微高地に位置している。B地区は、前述の如く前年度実施の分布調査において、遺構の確認はなかったものの、国分期（平安時代）に比定される土師式土器が調査区域内でも特に集中的な検出がなされたD地区に相当している。そのため、前年度の結果を踏まえ、A地区と同様、重点的に調査を進めた。その結果、国分期に比定される上師器片と時代を司る住居址を2軒、そして極少量ではあるが、纖文中期に比定される土器片を検出した。

### 1) 3号住居址

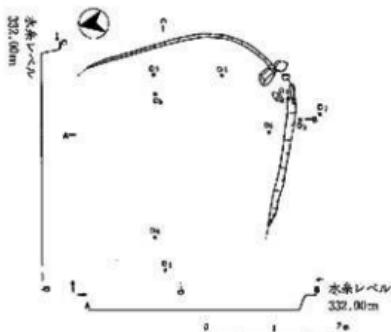
〔遺構〕(第19図)

3号住居址は、B地区の北すみに近く、後述する4号住居址にならぶ形で南北約12mの位置に所在する。地形は、高井大富神社から千曲川岸に向ってゆるやかに傾斜する河岸段丘上である。A地区と同様屢土が極めて浅く、壁は、ロームを約20~30cm掘り下げた部分を残すのみで、上部は消失していた。検出された残存範囲も、住居プラン南上部の竪柱から発する状態で、東方から西方に向って約2mの位置で、同じく南方から北方に向って約2.5mの位置で消失し、南壁、西壁については、その形跡すら認められなかった。しかし、東壁について、消失部が、直線部から住居址隅へ移行を始める部分を思わせる丸みを持って消失していることから、ここを隅と考えると、1辺約3m前後の圓角方形を呈する住居址であろうと推定される。住居址プランを確認した後、掘り下げを行ったが、柱穴・上塗等住居址に付随する遺構の検出は、電柱を除いてなかった。電址は、崩壊がはげしく、20~40cmの大形の河原石が、4個のみ推定される現位置に残存している状態であった。現存状態によって電址の構造を推定すると、床面を掘りさげ、電石をすえているのは、時に人形の河原石1個のみであり、他の3個はすべて粘土により二台的な窓壁を築いた上に大形の河原石をすえ付けて核とし、粘土をはり電址全体を構築している。窓内は、多量の焼土が充填していたが、窓内からの遺物の出土はほとんどみられなかった。

〔遺物〕

壺片(第19区D1、第21図1) 口縁部より肩部にかけ1/6残存。肩部から7mm程度の厚さを持ち、頸部に至って1mm程度細くなつたものの7mmを保ちながら口縁に至る厚ぼったい造りの土器である。胎土に雲母を含み、鉄分粒を含んでいる。焼成は良好である。

壺片(第19区D2、第21図2) 口縁部より底部にかけ1/3残存。器高が低く、小形



第19図 B地区3号住居址実測図

の土器である。底部内面は、心もち盛り上がりが認められ、外面は粗雑な糸切り底である。口縁はやや外反する。胎土は、雲母・石英を含む。焼成はややもろい。

坏片（第19図D3、第21図3） 口縁部より底部にかけて1/5残存。小形の上器で特に底部については1mm程度と薄手の土器である。口縁は、やや外反している。胎土は、雲母・石英を含む。焼成はやや良好。

坏片（第19図D4、第21図4） 口縁部より底部にかけて1/4残存。胎土は、雲母・石英を含み、鉄分粒をも含む。2、3同様小形の土器ではあるが、2、3に比べ全体的に厚手のため前者に比べ極くわずかではあるが重みを感じる。焼成はもろい。口縁部は、やや外反している。

坏（第19図D5、第21図5） 完形。器形、法量等2に類似する小形の土器である。しかし、2では、平面であった底部が、若干ではあるが、凹形になった粗雑な糸切底であった。口縁部は、やや外反している。胎土は、雲母・石英・鉄分粒を多量に含む。焼成は、良好である。

坏（第19図D6、第21図6） 完形。丁寧に横ナデ調整がなされ、器形の整った土器である。底部は凹形を呈した糸切底である。胎土は、雲母・鉄分粒を含む。焼成は、良好である。

坏（第19図D7、第21図7） ほぼ完形。底部は、若干凹形を呈した糸切底である。器外面一部にスマの付着した部分あり。胎土は、雲母・鉄分粒を含む。焼成はやや良好である。

碗形土器片（第19図D8、第21図8） 口縁部より底部にかけて1/2残存。底部は、若干凹形を呈している。糸切底と思われるが、その形跡がほとんど認められない程、磨滅している。二縁部は、口縁端部に至って顕著に外反している。裏面は内墨である、胎土は、雲母・石英を含む。焼成は、やや良好である。

坏底部（第19図D9、第21図9） 底部のみ残存。D2・D3・D4・D5と同類の小形坏の底部である。底部はD2・D3・D4と同様に平面を呈した糸切底である。胎土は、雲母・鉄分粒を含む。焼成は、良好である。

摩製石斧片（第21図10） 副部のみ残存。3号住居址覆土中より出土。残存する周囲から考察すると少なくとも、全長15cm以上はあるものと思われる。花崗岩製である。焼成を受けたものか、断面が赤く変色している。

このほか、極細片ではあるが、鍔蓋であると思われる土器片3片、3号住居址覆土中より縄文中期に比定される土器片が数点出土しているが、前述のとおり極細片であるため、この場所において記録するのみにする。



第20図 B地区4号住居址実測図

4号住居址は、前述の3号住居址とほぼ同位置に所在している。住居壁は、3号住居址のそれと同様、覆土が横めて浅くロームを約15cm程度掘り下げた状態で上部は消失していた。検出された残存する住居壁は、窓から発する状態で、一辺は東方から西方に向って約2mの位置で消失していた。もう一辺は、窓から北方に発し、約3mの位置で丸みを持ちながら東方から西方に向って直線的にのびて、西方に向って丸みを持ちながらカーブしかけた位置で消失している。検出された範囲から推想すると、長辺（南壁・北壁）約3.5m、短辺（東壁・西壁）約2.5mの隅丸長方形のプランを持った住居址であろう。プランを確認した後掘り下げを行ったが、窓の他住居址に付随する遺構は、3号住居址同様検出することが出来なかった。窓は、崩壊がはげしく20~30cm程度の河原石6個が、ほぼ現位置と推定される位置に残存していた。現存状態から窓の構造を推定すると床面を握り下げ、多少人形の河原石をすえ付け、その上部にU形の河原石を積み上げて核とし、粘土をはり窓全体を構築している。窓内は、多量の焼土が充填していたが、窓内からの出土遺物は、瓦片一点のみであった。

#### 〔遺物〕

瓦片（第20図D1、第21図11） 口縁部より肩部にかけて約1/4残存。口縁部から肩部にかけて、一定の厚さを保ち、残存部での変化は認められない。器外面の肩部やや下方にススの付着が認められる。内面の頸部より下方にヘラ削りと同範囲全面にススの付着が認められる。口縁部は、やや内反する。胎土は、雲母を含み、焼成は良好である。

瓦片（第20図D2、第21図12） 口縁部より頸部にかけて約1/4残存。口縁部から頸部にかけて、一定の厚さを保ち、残存部での変化は認められない。口縁部は直線的である。器面内側に表面の剥離した部分が認められる。胎土は、雲母・鉄分粒を含む。焼成は、良好である。

瓦片（第20図D3、第21図13） 口縁部より肩部にかけて、約1/5残存。口縁部から肩部にかけて、一定の厚さを保ち、残存部での変化は認められない。口縁部は、やや内反する。器面の外側一部分に、右上方から左下方に向って斜方向に八ヶ目調整痕が認められた。また外面には、表面の大きく剥離した部分が、顕著に認められた。胎土は、雲母・石英・鉄分粒を含む。焼成は、良好である。

瓦片（第20図D4、第21図14） 口縁部より胴部下にかけて、約1/3残存。胴部中央に最大径をもち、頸部下方に最薄部をもつ。口縁部は、やや内反する。器面は、外側に幾段かのヘラ削り痕が認められ、数ヵ所に削り屑が付着している。調整は、精巧で薄手の器形の整った土器である。胎土は、雲母を含み、焼成は、特に良好である。色調は、他の土器と特異で、黒褐色を呈する。

瓦片（第20図D5・D5'、第21図15） 口縁部から底部にかけて、約1/6残存。全体的に肉厚の土器である。底部は、ヘラ切り底である。調整は、口縁部から底部中央にかけては、横ナデにより、胴部中央より底部にかけては、ヘラ削りの後、不正方向でかつ粗雑な八ヶ目調整痕が認められる。この種の器形の土器は、1例のみの出土であった。胎土は、雲母・鉄分粒を含む。

焼成は良好である。なお本資料はD5 及びD5 の住居址内接合遺物である。

环片（第20図D6、第21図16） 口縁部から底部にかけて、約1／4残存。器高の低い土器である。口縁端部に至り、やや屈曲的に外反する。調整については、粗雑である。胎土は、雲母を含み、焼成は、良好である。

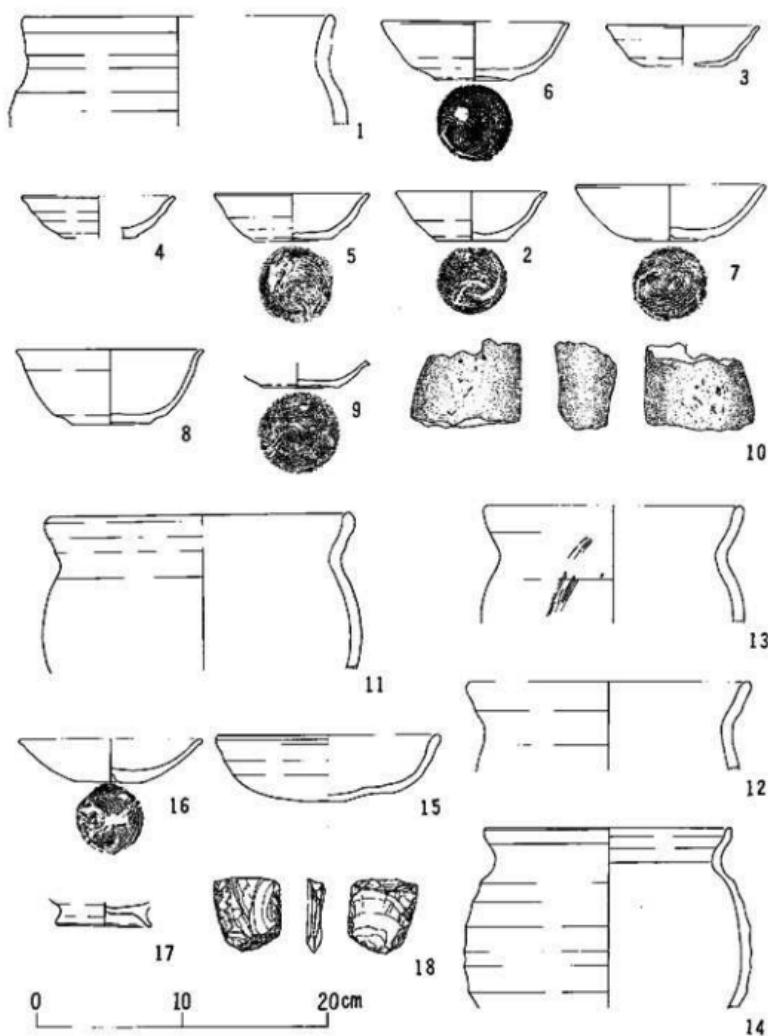
高台部破片（第20図D7、第21図17） 糸切り底で内黒の环部に、外反する高台を付している。端部は、直取りをせず、丸みをもって成形している。胎土は、鉄分粒を含み、焼成は、良好である。

打製石斧（第20図S1、第21図18） 4号住居址内覆土中より出土。刃部よりやや上方において欠損している。表面に一部自然面を残している。一次調整の後、二次調整は、それほど、戸念にはなされてはいない。伴出の繩文土器片より繩文中期に比定される遺物であろうと思われる。

### 3) 考 察

B地区においては、石組みの竈址を有する住居址2軒とともに、覆土中より繩文上器片及び住居址床面より、土師器片を検出した。検出された2住居址は、ともに伴出された土師器片より、区分期（平安時代）に比定される住居址であることが判明した。しかし、調査を進めるにつれ、発生した2、3の問題を指摘すると、第1に竈址の構築の差異である。3号住居址では、粘土による土台の上に河原石をすえ付け、竈址を構築しているのに対して、4号住居址では、床面を掘り下げ河原石を埋め込んで基礎をつくり土台として、その上に河原石を積んで、竈址を構築していることの違いである。第2の問題点は、出土遺物の差異である。全般的に住居址ではありながら、2軒ともに出土遺物の量が少量であることもさておいて、その出土遺物の器形に明らかな差異が認められることである。3号住居址においては、环が主であり、その量に比べて甕の量が極めて少ないとあり、4号住居址においては、その逆が言え甕の量に比べて环の量が少量であることである。時代を同じくし、構造・規模等においても、目立った差異ではなく、距離的にも約12mと極めて近距離にありながら、何故に前述の差異が生じたかと言ふ点である。目的によるものか、時間的な原因か、より詳細な研究が必要と考える。

(徳竹 雅之)



第21図 B地区3・4号住居址出土遺物実測図

### 3 C地区の遺構・遺物

C地区は高井大富神社より西方約100m標高は328.6~331mの段状に水田が開かれた場所で、3号住居址より西方20mの所である。千世川より揚水機による灌漑が昭和6年に完成したが、それ以前は3°の緩傾斜をもつ畠地で開拓時に削平されたため土層は擾乱されている。

昨年の遺跡確認調査に際しては10ヶ所に2×2mのグリットを設定し、3ヶ所より国分期の上師器細片を検出するにとどまり遺構は発見されなかった。

本年の発掘調査においてはC地区とし、いくつかのグリットを設定し遺構・遺物の検出をみた。グリットを拡張したところ、鍛冶址・炉址・土塗を発見し、それに関係する土器・鉄器・鐵滓等の遺物を検出することができた。

つぎにこれ等について報告したい。

#### 1) C地区B~F-5~8グリット

##### 【遺構】(第22図・23図)

【炉址】炉址はB~F-5~8グリット内から検出された。炉に使用されていた石の大半が亡失しており、現存していた石は、わずかに2個のみであった。炉に使用されていた石は、いずれも自然石で、大きな方は幅20cm、長さ35cm、高さ30cmと大型のものが地中に立てられていた。もう一方の石は幅15cm、長さ25cmのものであった。炉址の周辺からは、この他2個の石が出土した。しかし、いずれも前述した石とは、比較にならないほどの小さなものであり、レベルからみてもかなり上部にあることから、炉址とは直接関係がないものと思われる。

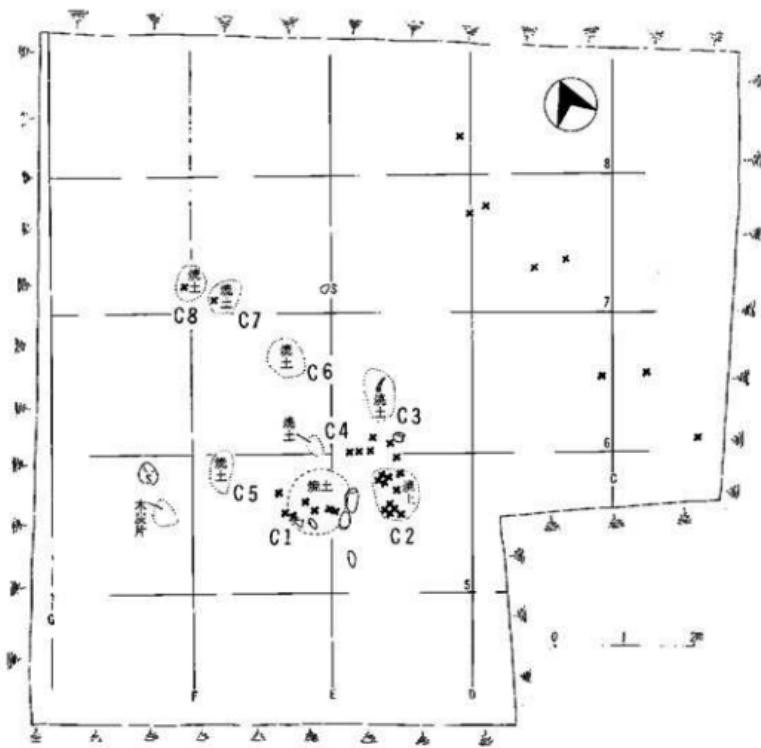
炉址内の焼土(C1)は、直径90cm、厚さ20cmで、わりあい厚く堆積していた。炉址内の土層は、2層の層序から成っており、第1層は黒褐色土層で厚さが15cmであり、第2層は黒色土層となっていた。この炉址内の焼土からは、国分期の土器片が集中的に出土し、中でも甕の口縁部や腹部が多かった。

また、炉址の周囲から北西にかけて、直径50cm前後の焼土が7ヶ所検出された。これらの焼土のうち、C3には大量の木炭片が含まれていた。焼土C2・C7・C8からは、やはり国分期の土器片が出土している。特にC2の焼土からは、土器片が集中的に出土した。さらに、C8の焼土の中からは完形の甕が1点出土している。

柱穴及び住居壁を検出するために、遺物を取り上げてくわしく調べたが、いずれも検出することはできなかった。炉址周辺の土層が黒色土層であったことにもよるが、住居址と断定することができなかつたのは残念である。この炉址が検出された場所は、今回発掘調査が行われた地区的うちでも一番低いところに位置している。床面も地表から150cmほど掘り下げたところにあり、この遺構は千曲川の氾濫によって擾乱され、大量の土砂が堆積していったのではないかと思われる。

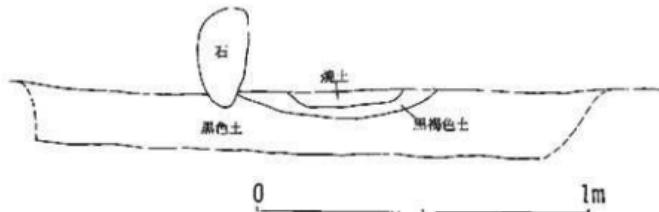
##### 【遺物】

炉址周辺部からは、合計130点余りの土器片が出土している。須恵器片6点を除いて、いずれ



第22図 C地区B～F-5～8グリット実測

水位レベル 331.30m



第23圖 爐址(C-1)斷面圖

も国分期の土師器片であり、光形のものは坏1点のみで、正側的に甕の口縁部や脣部が多かった。焼土内から集中的に出土しており、焼土以外から出土したものは分散的で、あまりまとまりが見られず、擾乱が相当激しいものであったのではないかと考えられる。以下、代表的な遺物について述べてみたい。

坏(1～3) (1)は口縁部が、約半分欠損している。糸切底を有し、内部は内黒で、内外側共にハケ目調整がなされている。(2)は光形で、(1)と比べてやや厚手である。やはり糸切底を有し、内外便にわたってハケ目調整がなされている。なお、口唇部には、タール状物質が付着している。(3)は底部が欠損しているが、非常に薄手で大型のものである。

甕(4～5) 共に口縁部の立ちあがりがまっすぐにのびているが、(5)の方はわずかに内湾している。いずれも、内外側にハケ目調整が施されているが、(4)のほうは外側にヘラ削りのあとがみえる。

甕(6) 口唇部に面取りがみられ、やや外反している。また、口縁部の中央部が外側に張り出して丸みをおびている。内外側共にハケ目調整され、赤褐色を呈している。焼成が非常に良好で、須恵器のように硬い。焼成温度が他の土師器と比較して、高かったものと思われる。胎土には、雲母・石英の粒子が含まれている。

甕(7) 口唇部が外側に突き出し、口縁部が外反し凸凹がみられる。内外側共にハケ目調整が施されており、外側は明褐色で内側は赤茶褐色である。口唇部に粘土が付着しており、胎土には雲母・石英の粒子が含まれている。

甕(8～9) 口縁部がくの字に外反し、口唇部が内閉している。口唇部の内側が内湾し、内外側共にハケ目調整が施されている。(8)は外側にヘラなでがみられ、内外側共に色調は明褐色している。(9)の外側は、全体的にヘラでよく磨かれている。外側は明褐色で、内側は赤褐色を呈している。

甕(10) 立ちあがりがほぼまっすぐで、口唇部が(7)の8つに張り出し、口縁部に凸凹がみられ内湾している。内外側ともに、ハケ目調整がみられるが、脣部の外側はヘラ削り調整も見られる。色調は内側が明褐色で、内側は赤茶褐色をしている。口唇部には、粒十が付着している。

甕(11～13) 口縁部がくの字に外反し、口唇部が内閉している。口唇部の内閉は(8～9)のものよりも丸みをおびている。口縁部は、ゆるやかな曲線で内湾している。内湾している部分の内側は、ハケあるいはヘラできれいに調整されている。全体的に小型で薄手に作られている。内外側共に、ハケ目調整が施されており、特に(11)の外側はきわめてハケ目が明瞭である。(11)の色調は、内外側共に暗褐色で、(12)は外側が赤褐色、内側が明褐色である。(13)は内外側共に灰褐色を呈している。

甕(14) 今回出土した土器の中では数少ない須恵器の脣部で、内側には青海波文がみられる。色調は青灰色をしており、胎土・焼成共に良好であるが、内部には気泡がみられる。

甕(15) 須恵器の口縁部から脣部にかけてのもので、大きく外反している。内外側共にハケ

目調査が施されている。口唇部には粘土が付着しており、色調は外側が灰色で内側は黒褐色である。胎土はやや不良で、焼成もあまり良いとはいえない。

(酒井 健次)

## 2) 繩文時代の遺物

グリット D-24 口縁部 1、E-21 口縁部 1・無文 2、E-23 有文 1・無文 1、E-24 口縁 1・有文 6、E-26 口縁 1・有文 1・無文 4、E-27 有文 3・無文 1、F-23 無文 1 の合計24点の検出を見た。何れも文様から見て加曾利E式とみられる。

(第26図)

## 3) 銀治炉址 (第24図、25図)

### 〔遺構〕

グリット H-16 表土下約60cmのところにあり、銀治炉に使用されたと思われる炉が東西約80cm、南北約50cmの中に最大石縁45cm、横18cmを中心に12個の石があり、とくにこの石が赤褐色に焼けただれて、表面はくずれ落ちていた。この他まわりの石もかなりの高熱で、焼かれたものと思われ、ひび・割れ・剥離したものが見られた。

### 〔遺物〕

この炉址付近より鉄滓 1 巾5cm・高さ4.5cm・横最大巾4cm・重さ146g暗黒褐色の塊りである。この鉄滓1より南3.7mの地点で、鉄滓2の検出をみた。一辺が4.5cmの角丸の三角形を呈している。

この他に、壺・高台壺・壺・鋸釜・灰釉高台壺・須恵器片のほか、土師片多数が出土した。(表5)

## 4) 土 坯

### 〔遺構〕

土塙についてグリット E-23で、地表下約30cmのところにあり、径東西約1.4m、南北約1.3m、最深部0.3m、南東側を除いてほぼ円形である。(第26図)

### 〔遺物〕

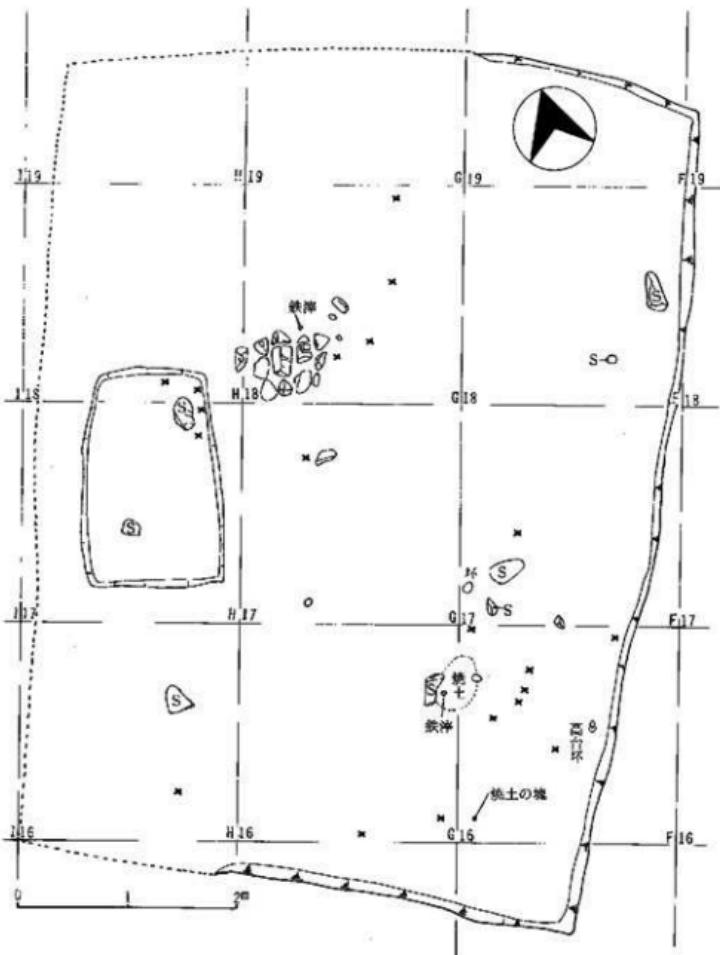
この土壤東側に壺、この壺より北西側0.6m離れた地点に鉄器が、またこの土塙中心部より南西側2.8mの地点で刃子の検出をみた。(第26図、第5表)

### その他

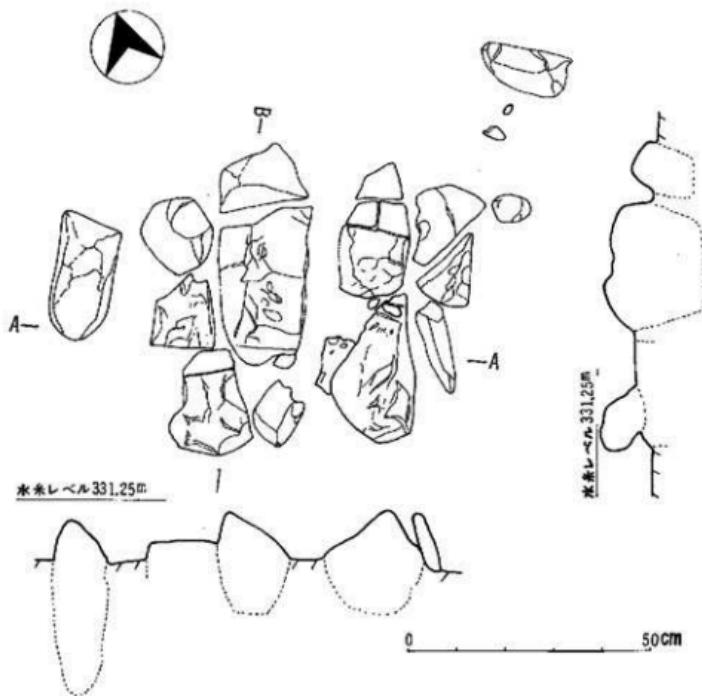
鉄器 グリット D-24 全長15.2cm最大巾2.7cm背部の巾0.6cm、重さは67gで左右両端が欠損しており、全面鋸化が甚だしく刀子か、直刀かは不明瞭である。

刀子 グリット E-23で検出された。全長9.8cm最大1.7cm背部の巾0.5cm、重さ22g背部刀部柄部向側面全体に鋸化が甚だしい。

この他グリット E-22、E-28を中心にして、約60m<sup>2</sup>内より黒耀石製の石鏡1・不7・高台付壺10・須恵器片5の他に土師器細片多数の出土をみた。(第26図、第6表) (池田 実男)



第24図 C地区鋳冶炉付近図



第25図 C基区導帯活性測定

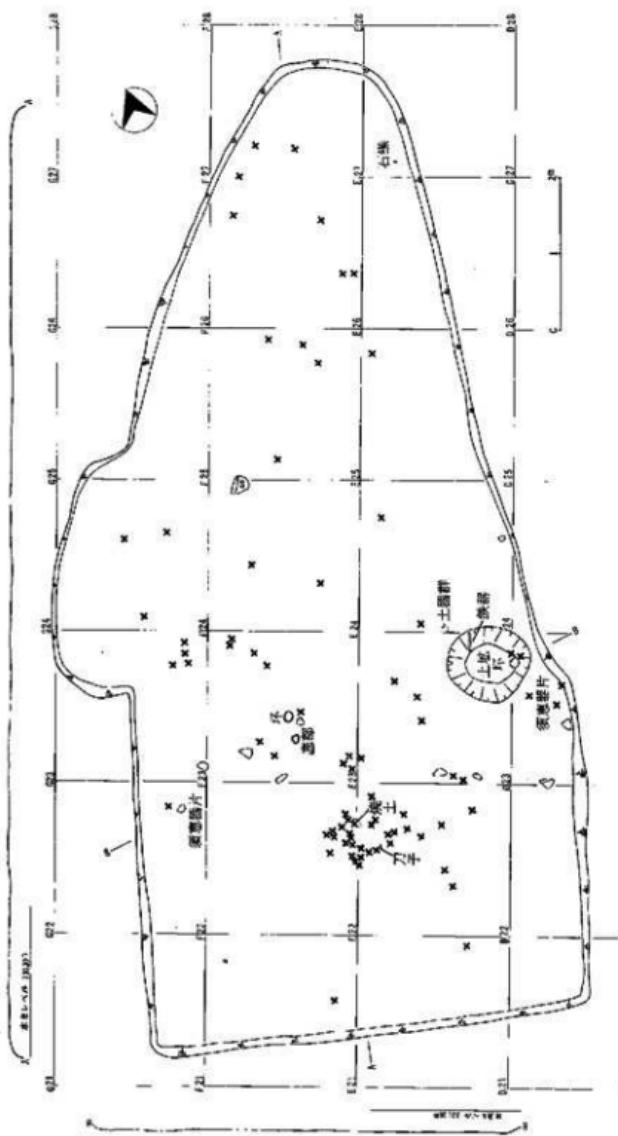
### 5) 考察

本調査区は、開田の折に削平され上層は擾乱されており、縄文中期土器細片が散発的に検出するにとどまった。また鐵冶址状遺構については前記したが、これも鐵鋸・刀子・国分期の土師壊片・臺台付壠片・壠片・銅鑄片其の他の出土をみたが、第4次栗林遺跡発掘調査昭和55年11月また第3次安原寺遺跡発掘調査昭和51年11月に見られるような遺構遺物の出土はみられず、鐵冶址と断定するには資料不足といわなければならず、住居址等の遺構も確認することができなかつた。

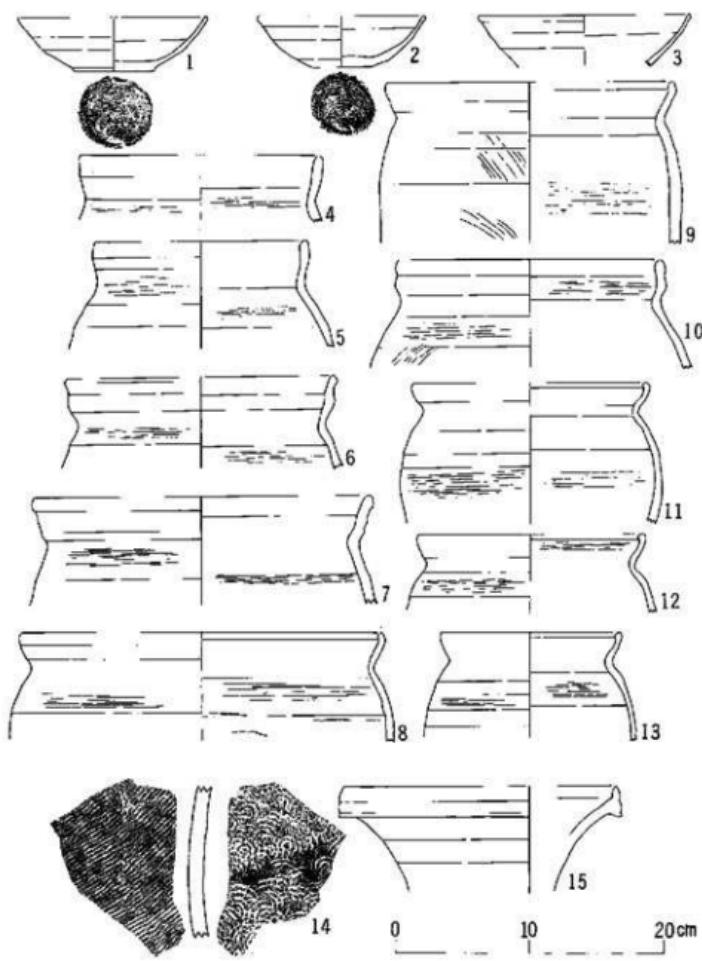
周辺のD-24で出土した遺構は、遺物の出土状態からみて、土塗としてみたい。

E-21 E-28迄の拡張部についても遺構は発見されず、やはり遺物の散発的出土にとどまった。  
(池田 実男)

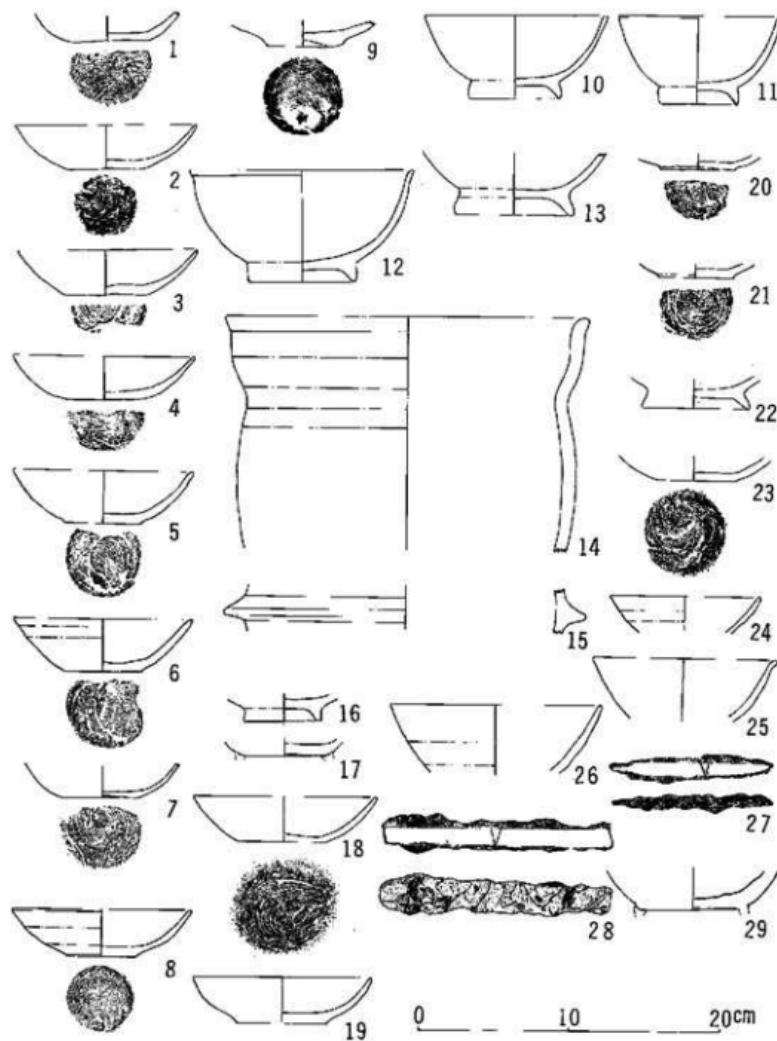
(池田 実男)



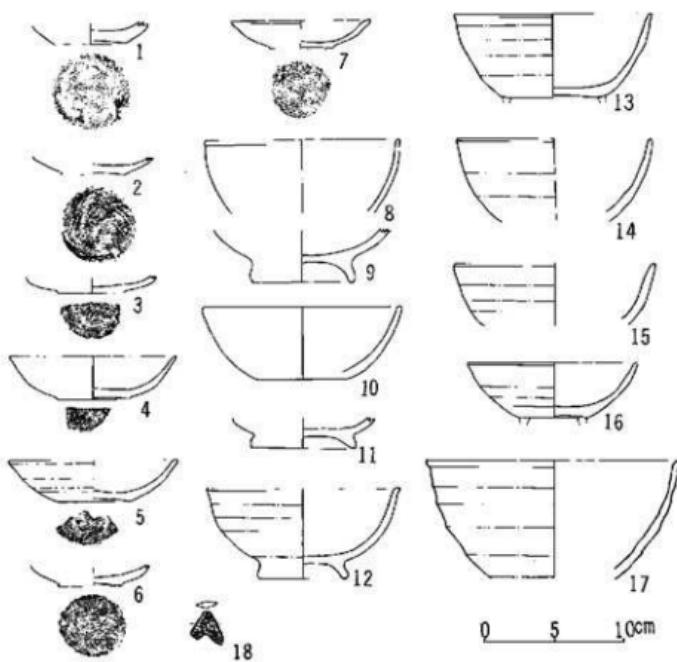
第26图 C地区遗物绘出图



第27図 C地区出土遺物実測図



第28図 C地区出土遺物実測図



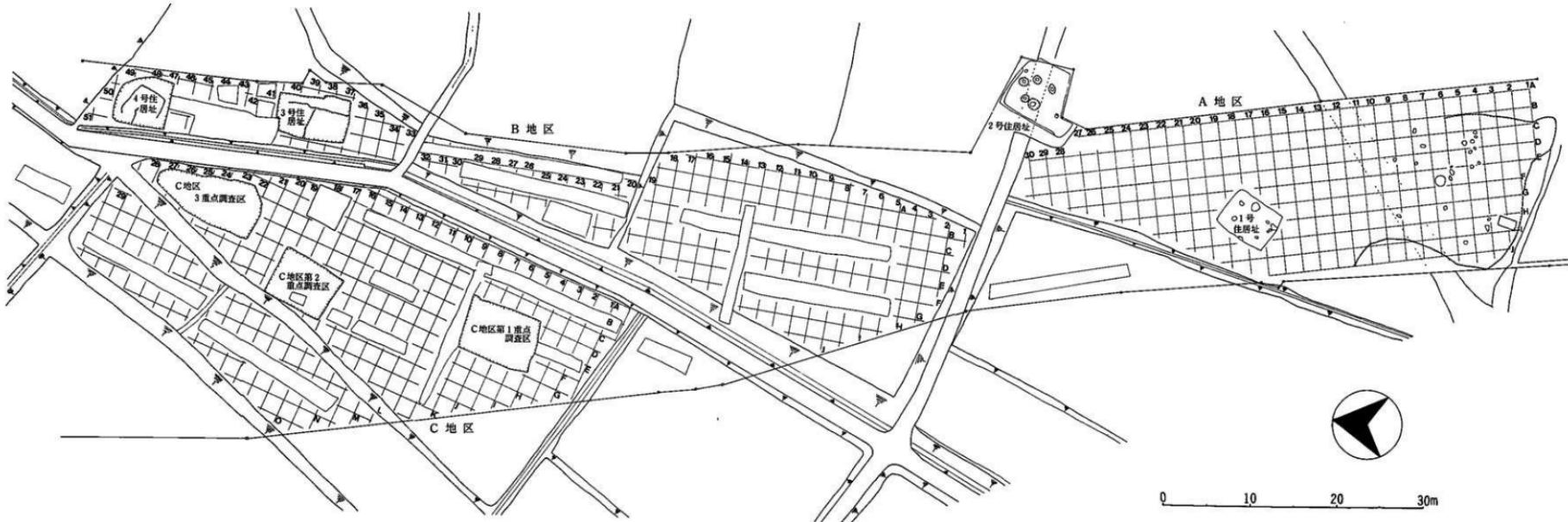
第29図 C地区出土遺物実測図

第5表 C地区出土遺物觀察表(第28回)

番号	器形	度量 (cm)			形態の特徴	手 法 上 の 特 徴	新 土	被成	色 質		備考		
		器高	口徑	底径					外	内			
1	杯	1.8	9.5	5	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外内共に2-3mmの石縫合む 良好	やう い	明黄色	明褐色	鑄冶炉址1		
2	杯	2.9	1.2	4	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	茶褐色	茶褐色	鑄冶炉址4	
3	杯	3.5	12	5	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	深褐色	深褐色	鑄冶炉址5	
4	杯	3.5	12	5	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	灰黑色	灰黑色	鑄冶炉址5	
5	杯	2.9	12	5	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	明黄色	明褐色	鑄冶炉址6	
6	杯	2.9	12	5	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	黄茶色	茶褐色	鑄冶炉址6	
7	杯	残存部 残存部 残存部	10	5	残存部 残存部 残存部	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	明褐色	明褐色	鑄冶炉址9	
8	杯	残存部 残存部	9.5	5.4	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	明茶褐色	明茶褐色	鑄冶炉址10	
9	杯	3.2	12	4.2	完形、未完成	外面クロコ彫形後ハケナダ	外面縫合む 内面石縫合む	良好	やう い	黄茶褐色	黄茶褐色	鑄冶炉址10	
10	高台 付柄	7	14.8	8	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面石縫合む	良好	やう い	明褐色	黑色	鑄冶炉址9	
11	高台 付柄	6.8	10.5	6	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	深褐色	黑色	鑄冶炉址10	
12	高台 付柄	残存部 残存部	4.3	12	8	残存部 残存部	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	明褐色	暗褐色	鑄冶炉址12
13	高台 付柄	5.5	12	6	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	深褐色	黑色	鑄冶炉址12	
14	瓶	残存部 残存部	15.5	2.4	不明	口縁膨大部 系底窓	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面ハケナダ	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	明褐色	黑色	鑄冶炉址8
15	壺	残存部 残存部	3	21	不明	残存部 残存部	タケナ-内ハケナダ、跡は空 に後でつけている	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	暗灰色	黑色	鑄冶炉址13
16	高台 付柄	残存部 残存部	1.7	不名	5	武部残存部 残存部	手縫手縫合のもの		良好	やう い	明褐色	明褐色	D-E-21-27
17	高台 付柄	1.7	不名	6.5	残存部 残存部	手縫手縫合のもの	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	明褐色	黑色	D-E-21-27	
18	杯	3	12	6	橢形西作部 付柄	外面クロコ彫形 内面クロコ彫形	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	基褐色	茶褐色	E-21-27 十瀬	
19	杯	3	12	8	橢形西作部 付柄	外面クロコ彫形 内面クロコ彫形	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	灰茶褐色	深褐色	E-21-27	
20	杯	残 付柄	1	不名	5	底細少底縫合	外面クロコ彫形 内面クロコ彫形	外面縫合む 内面縫合む	良好	やう い	褐色	黑色	E-22-27
21	杯	1	不名	4.5	底部無底窓	外面不明	外面石縫合む 内面石縫合む	やや良好	やう い	明褐色	明褐色	E-21-27	
22	高台 付柄	2.3	不名	7.2	底縫合付柄 縫合底	外面レコ彫形付柄 内面二次底縫合で不取	外面縫合む 内面縫合む	やや良好	やう い	深褐色	茶褐色	E-22-27	
23	杯	1.6	不名	5	非底窓	外面クロコ彫形 内面クロコ彫形	外面縫合む 内面縫合む	やや良好	やう い	明褐色	明褐色	E-22-27	
24	杯	残 付柄	2.4	10	不名	口縫合付柄 縫合底	外面クロコ彫形 内面縫合	良好	やう い	黄茶褐色	茶褐色	E-22-27	
25	杯	残 付柄	4.1	12	不名	口縫合付柄 縫合底	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面黑色縫合	良好	やう い	深褐色	黑色	E-22-27	
26	高台 付柄	4.5	14	不名	山形25.4付 底	外面クロコ彫形後ハケナダ 内面一次縫合のため不取	石英砂岩合む	やう い	明褐色	深灰色	E-22-27		
27	刀子	巾 付	骨 付	重さ 1.7	6.7 67g	長さ3.8cm						E-23	
28	鉄器	巾 付	骨 付	重さ 2.7	6.7 67g	長さ15.2cm	万形骨質表面成化					D-24	
29	灰陶 付柄	肉 付	2.5	不名	7.6	底縫合付柄 縫合底	外面クロコ彫形、内面二次底 縫合する無縫合がみられる	重い	灰色	深褐色	鑄冶炉址11		
30	灰陶 付柄	高 付	4.5	5	不名	高さ14.0g			暗黑色	深褐色	鑄冶炉址11		
31	灰陶 付柄	4.5	4.5	4.5	不名	重さ88g			黑褐色	深褐色	D-19		

第6表 C地区出土遺物觀察表(第29回)

番号	器形	寸 長(cm)		断面上の特徴	手法上 の特徴	状	二	色 調		備 考	
		高	幅					外	内		
1	杯	1.6	不明	5.5	底部残存	外面ロクロ型 内面平ナゲ	砂段多 凹凸多	やゝ量	もろ い	黒褐色 茶褐色	E-22-22
2	杯	残部 1.4	不明	5	底部残存	外側ロクロ型 内面ロクロ型	外面石英少量穴む 内面石英少量穴む	やゝ量	やゝ 多い	明褐色 明褐色	E-22-22
3	杯	残部 1.2	不明	5	底部残存	外側ロクロ型 内面平ナゲ	外面石英少量穴む 内面石英少量穴む	良好	やゝ 多い	赤褐色 内 黑	E-23
4	杯	3	12	6	底部残存	外側ロクロ型	外山形少量む 内山形少量む	やゝ量	やゝ 多い	茶褐色 茶褐色	E-23
5	杯	3	12	6.6	底部残存	外側ロクロ型後半ナゲ 内面山ナゲ	外側凹凸多し 内面凹凸多し	良好	多い	茶褐色 茶褐色	E-23
6	杯	残部 1.5	不明	5.5	底部残存	外側ロクロ型 内面ハラニア	外側凹凸多し 内面凹凸多し	良好	多い	赤褐色 赤褐色	E-24
7	杯	2.1	10	4.5	底部残存	外側ロクロ型 内面ロクロ型	外側砂岩多量含む 内面砂岩多量含む	良好	やゝ 多い	薄赤色 明褐色	D-23
8	高台 付杯	残部 5.2	14	不明	口縁部残存	外側ロクロ型後ハナナニア 内面ハナナニア	外面凹凸少量含む 内面凹凸少量含む	やゝ 多い	茶黑色 茶黑色	内 黑	D-22
9	高台 付杯	残部 3.8	不明	7.2	底部残存	外側ロクロ型 内面ハナナニア	外表面砂岩含む 内面凹凸少量含む	良好	やゝ 多い	薄赤色 薄灰黑色	D-22
10	高台 付杯	5.2	16	小化	底部残存	外側ロクロ型 内面ロクロ型	外表面母岩少量含む 内面砂岩少量含む	やゝ量	もろ い	黄茶褐色 黄茶褐色	D-22
11	高台 付杯	2.2	7.4	底部残存	外側残存 底部欠損	外側ロクロ型 内面ロクロ型	外表面部分少量含む 内面砂岩少量含む	良好	やゝ 多い	茶褐色 茶褐色	D-22
12	高台 付杯	6.5	14	6.6	底部残存	外側ロクロ型後はけなで 内面山ナゲ	外表面含む	やゝ量	やゝ 多い	明褐色 内 黑	D-24
13	高台 付杯	6	14	7.5	底部残存	外側ロクロ型 内面平なで、點高台	外表面砂岩含む 内面凹凸少量含む	やゝ量	やゝ 多い	黑茶褐色 灰褐色	E-22
14	高台 付杯	6.4	15	不明	口縁部残 存	外側ロクロ型 内面はけなで	外表面ロクロ型黃褐色 内面はけなで	やゝ量	やゝ 多い	黄褐色 灰黑色	E-22-27
15	高台 付杯	4.4	14.5	不明	口縁部残 存	外側ロクロ型 内面はけなで	外表面砂岩含む 内面凹凸少量含む	良好	やゝ 多い	明褐色 内 黑	E-22-27
16	高台 付杯	4	12	不明	高台・次仏 付杯	外側ロクロ型 内面はけなで	外表面凹凸多し 内面凹凸少量含む	良好	やゝ 多い	明褐色 内 黑	K-24
17	大形 残部	8.5	18	不明	底部残存	外側ロクロ型 内面はけなで	外表面砂岩含む	やゝ量	やゝ 多い	赤褐色 内 黑	E-24
18	鉢	高さ 4.5	巾 4.5	深さ 4.5	重さ 38g						G-16



第30図 59年度発掘調査グリッド設定図及び遺構検出位置図



## 第4章 結び

大保部落の水害防土のため、宮反遺跡にかかる築堤予定地内の緊急分布調査を建設省千曲川工事事務所から依託され、昭和58年夏に実施した。その結果、高井人富神社の裏手に、長さ170m、幅22~33mの範囲に遺構・遺物が分布していることが判明した。そこで原因者負担による記録保存のための緊急発掘調査を6月19日~8月28日まで実施したのである。地形と緊急分布調査による遺構・遺物の検出状況からA~Cの三地区に分けて調査を行った。

A地区は、自然堤防状微高地で、現状は畑作地である。以前に神田五六氏が調査され、縄文中期末の住居址3戸を発掘した近傍にあたっている。そこで縄文時代の住居址の検出を期待していたが、今回は加曾利E期の住居址が僅かに残ると思わせる炉体土器（塗鉢）のほか土器片・石器類の検出にとどまった。1号住居址南側からは縄文中期末の円形プランの土塗1基が検出された。

弥生最大期から古墳時代初頭と推定する住居址2戸を検出し、高环・环・器台・壺・培・碗等の出土をみた。この2号住居址の床上10cmで、埋納事情の不明な墨書き師器（环）には「金」としられ、中野市内における発掘で初例のものを得た。

B地区は神社の真裏にあたり、北西へ傾斜する畠地である。分布調査の折には平安時代（国分期）の土師器片が多く出土した場所であった。比較的規模の小さい隅丸方形の堅穴住居址2戸を検出し、南側に石組築が架設されていた。住居址内から糸切底をもつ环を主体に、壺片・壺片少量が発見され、3号住居址外の南側から土製錫釜片の出土もみた。縄文中期末の土器片も少量検出されたが、上段の畠地から流れ落ちたもののことである。

C地区はB地区的下段にあたり、昭和6年の開田時に北西へ緩傾斜面を削平したため地層はいぢじるしく擾乱されていた。今回の発掘によって、鍛冶遺構と想定される石組・鐵器片・鐵滓等の出土をみたが、鍛冶址と断定するには資料不足の面がある。この地区からは刀子・土師器（环・高台付环・壺）、須恵器（壺片）を得、平安時代中期頃のものである。

以上予想外の成果をあげ、上古代史光明に多くの資料を提供できることを幸甚に思うものである。

本調査に関係された多くの方々をはじめ、大保区をあげて物心両面にわたって御援助くださったことに対し、心から謝意を申しあげる次第である。

(金井 淳次)

# 図 版



発掘作業風景



小学生の発掘調査見学學習





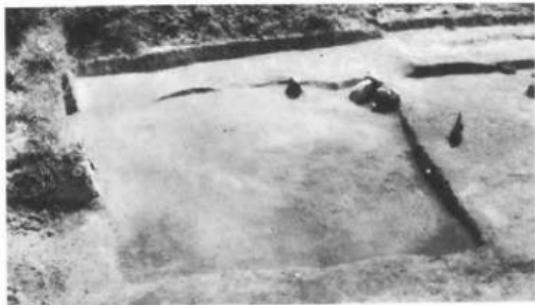
1号住居址内出土  
甕(第18図1)出土状態



1号住居址内  
貯蔵穴掘り下げ



2号住居址



3号住居址



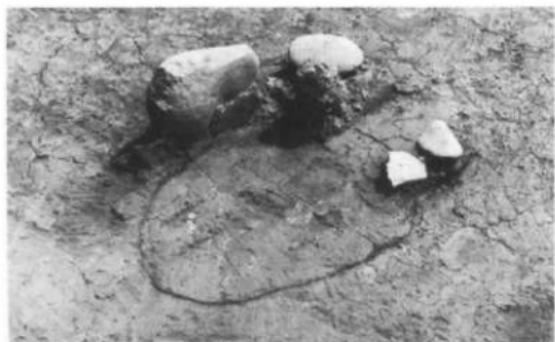
3号住居址内炉址



4号住居址内炉址



4号住居址



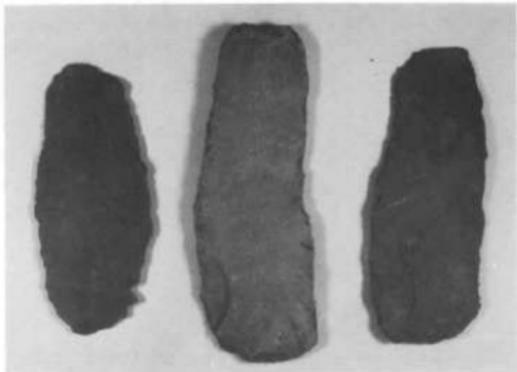
C地区内検出の炉址



C地区内検出炉址の断面



C地区内検出鍛冶址



A地区出土石器



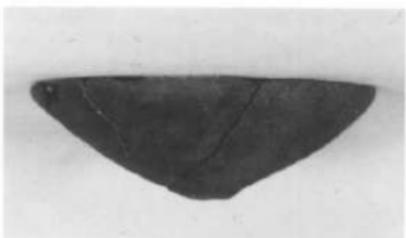
A地区出土石器



A地区出土縫文土器



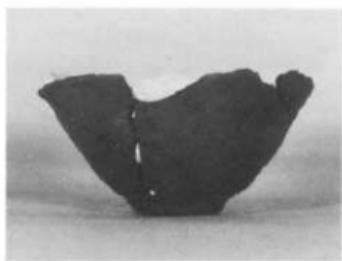
1号住居址出土甌(第18圖1)



1号住居址出土高环杯部



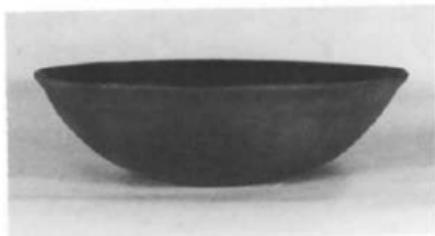
1号住居址高环脚部



1号住居址出土土器



2号住居址高环脚部

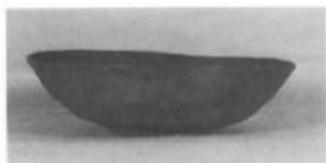


3号住居址出土环



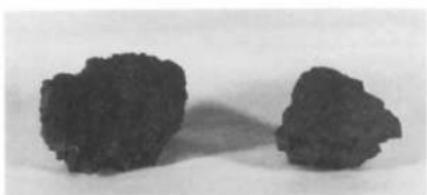
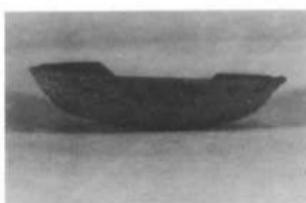
①二号住居址出土环  
② " 墨书「金」

3号住居址出土杯



C地区鍛冶址出土环

C地区炉址附近出土环



C地区鍛冶址出土铁滓

C地区出土环

## 宮 反

宮反遺跡緊急発掘調査報告書

1985年3月20日

発行 中野市教育委員会

印刷 ほねづき書籍株式会社

